

第八、中央亞細亞人民(下)。

パシユカルの運命は他の中央亞細亞種族の運命を説明す。露西亞が長き間、パシユカル地方に施して功を奏し、他の中央亞細亞種族に對して現在施しつゝあり、將來施さんとする同化政策には左の方法及び順序あるを見る。

一、最初に於て露西亞は寛大なる服従の程度を以て満足し、土人をして依然權力を有ち、制度を有ち、傳説、風習を有らしむ。

一、かゝる間に一方に於ては最も有力なるものに、惜むなく勳位、名譽の如きものを與へて虚榮を好む亞細亞的精神を満足せしむ。キルヤツツの「ソルタン」にして士官に任せられたるもの少なからず、バー、マホメットの如きは將官の地位にまで陞せられたりキ。

一、他方に於てはまた漸次舊來よりの貴族を削除し、露西亞に重恩を負ひ全身を献けた

る新勢力を養成して之に代ふ。

一、劫奪は中央亞細亞種族の生活たり、名譽たり。而して露西亞の之を禁すること最も嚴重、之を罰すること最も苛酷、時としては一人の劫奪者を捕へ得ざるか爲めに全村を焼き、一村の爲めに全種族を罰す。かくて露西亞の權威大に半開種族の間に尊重せらる。

一、異制度、異風習、異政治、異傳説は遂に長き間露西亞の領内に存在するを許されず。一枝一葉漸を以て削り取らる。

一、被征服者は征服者の干涉漸く増進し、昨日一葉を落され今日一枝を削られたるを見て、遂に根本より截斷せられんことを憂へ、未だ晩からざる時に於て叛亂の刃を振ふ。而も此の時、露西亞の力既に強く、叛亂は遂に鎮定せらる。

一、初度の叛亂充分に鎮定せられて征服者の強硬壓抑政略は非常の速力を以て増進す。強硬壓抑政略は再度の叛亂を激成し、再度の叛亂鎮定せられて壓抑愈々甚しく、因果循環して最後の叛亂となり、最後の鎮定となる。

一、各種族の軋轢、争鬪を利用し勞少なくして功多き征服及び同化をなすべきことはカ

ザリン女帝がオレンブルク及び悉比利亞總督に與へたる錦囊の策なりき。かくて「キルキツ」及び「メスチエラク」族は「バシニカル」族を征服する爲めに用ひられ、「カルムツク」族を鎮壓するが爲めに用ひられ、而して外交は適當の地を撰びて露西亞黨の種を蒔き、露西亞黨を育て、軋轢、争鬪をして愈々甚しからしめ、最も慄悍無頼なるものをして軋轢、争鬪の間に自ら其の勢力を消耗せしむ。

一、イオワン烈帝がカザンを取り、總ての男姓住民を一人も剩さず殺戮したるが如き、スコベレフが「ゲオク、テツフ」を征討して、守兵を塵殺したるが如き果斷の慘酷は、他の種族をして激昂せしめざるのみならず、却つて潜伏せしめたりき。

- 一、被征服者既に叛亂の勇氣なきに至りて、哥索克制度を以て之を統一し之を訓練す。
- 一、哥索克制度充分に効を奏するに至りて、遂に之を露西亞農民に編入して同化の功を全ふす。

露西亞は同化の効を擧げずんば、其の征服を完全なりとなさず。バシニカルは長き間、多くの方法によりて、多くの階段を経て遂に全く同化せられたり。「キルキツ」及び「トルコ

マン」の諸族、征服せられてより日未だ淺く、露西亞が彼等に施しつゝある同化政策は尙ほ初步に屬すと雖、バシニカルの運命は遂に彼等に廻り來らざんばならず。同化的大熔解爐の熱は漸を以て加へられつゝある也。千八百八十五年セチラル、クロバトキンの報告によれば、セミレンチエンスクの哥索克は漸を以て増加し、最近三十年間に於てセミレンチエンスクに居を定めたる殖民の數約六萬、シル、ダリア、フェルカナ、及びセラフシヤンに居を定めたるもの二萬五千内外なりと云ふ。

第九、之を要するに。

之を要するに、今日までの露西亞が征服的勢力として、また同化的勢力として最も著しき活動を示したるは亞細亞方面にあり。過去を觀察して將來を推測するものは、左の數點を歸納し來るべし。

征服

(第一)、露西亞は數世紀の間、徐々として而も確實に、曾つて最終の到着點を忘ることなく亞細亞を侵奪せり。

人民同化

(第二)、露西亞は單に征服するのみを以て満足せず、既に征服したるものは同一の執着力と同一の貫徹力を以て同化せんと務めたり。

土地同化

(第三)、征服したる人民其物を同化する能はざる時に於ては、其の人民を掃蕩し放逐し、露西亞人を移して土地其物を同化せんと務めたり。

成效

(第四)、露西亞の同化政策は多くの場合に於て成效したり、また成效しつつあり、而して

結果

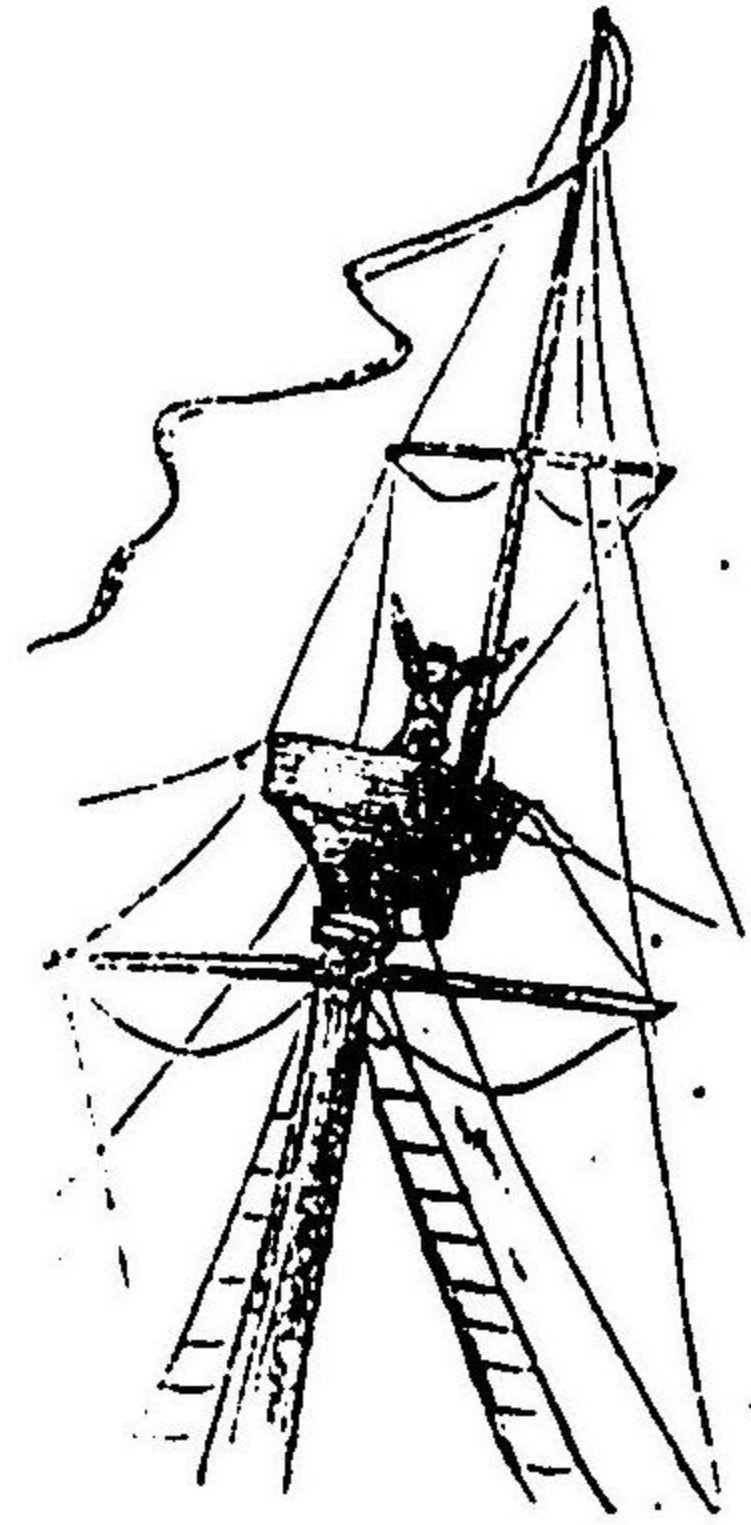
少なからぬ利益を露西亞に與へたり。

(第五)、されば亞細亞に於ける露西亞の地位は甚だ確實なり。其の征服したる人民の忠實につき憂慮すること少なきのみ止まらず、彼等を使役して有利なる武力となしつゝあり。

十九世紀
或は廿世紀
のタメル
ン紀

特に中央亞細亞に於て然りとなす。中央亞細亞の同化充分に成效し、後裏海鐵道、中央亞細亞鐵道、悉比亞鐵道完全に竣工せば、露西亞は遂に十九世紀、或は廿世紀のタメルンたり、ヤンギスカンたらんことを欲せずして止まんとする乎。アフガニスタン、印度は云ふまでもなく、支那トルキスタンは最も大なる罅隙を、侵奪的露西亞の目前に開くものにあらずや。滔々たる支那の政治家、長城以外、沙漠以外、遂に支那の有たらざるべきを知らざる乎。

露西亞の侵奪及び同化は最も著しく中央亞細亞に行はれたり。而もこれ對岸の火災にあらず。同一の方法、同一の順序は更らに迅速の程度を以て、滿州の周圍、朝鮮の北端、太平洋の沿岸に、行はれつつあるを見ずや。



露西亞國民

第一、西歐國民と露西亞國民。

英人某曾つて云へるあり、「露西亞人が爲さんと欲することを豫測する難きにあらず、先づ我等英人は何を爲さんと欲するかを思ひ、而して後其の反對に思ひ及ぼさば、直ちに露西亞人の希望に到着すべし」と。

世界現今の形勢を説くもの必ず英露の衝突を云ふ。英露の衝突を云ふもの皆な利害の相違を云ふ。衝突は常に利害の相違より來ること多し。されど露西亞の英吉利と衝突するもの單に利害の關係のみに止まらず、個人としての性質に於て、國民としての組織に於て、其の天然に於て、其の氣候に於て、其の歴史に於て、其の傳説に於て、其の政治に於て、總

英露の衝突に
みは利害の
衝突にあら

てのもの總て異ならざるはなき也。所謂英露の衝突なるもの國民全体と國民全体との衝突也。皮相の衝突にあらざりして、實相の衝突也。東に向はんとする水と西に走らんとする水との衝突にあらざりして、濕ほさんとする水と燃さんとする火との衝突也。何ぞ單に利害の衝突のみを以て見ることを得んや。共和主義の豫言者たる佛蘭西と専制主義の法皇たる露西亞との同盟は近世奇怪の骨頂として或るものによりて嘲らる。されど兩國の性情には一點靈犀の通ずるあり。既に國民の性情によつて同盟を組織す、其の同盟は牛と馬とを繋げる遼東の車の如く奇怪なるものにはあらず、同舟して難に遇へる吳越の人の如く出來心のものにはあらずる也。されど「ララン」人と同盟し得る露西亞人は決して「アングロ、サクソン」人との同盟を望み得る能はず、また決して望むことあらずるべし。露西亞に於て近時奇譚と稱せらるゝ多數の愛國者の露西亞を觀るや、曰く露西亞は歐羅巴の露西亞にあらず、亞細亞の露西亞にあらず露西亞の露西亞なりと。彼等の西歐諸國を觀るや、曰く西歐の文明は既に衰頽に傾けり、我等は之に新生命を與へざるべからず、西歐の文明は既に腐敗に近づけり、我等は之に新活動を與へざるべからずと。而して彼等の非

難者が何故に進歩したる西歐の文明を模倣して西歐文明の列に加はらざると云ふや、答へて曰く、西歐文明の衣は、將來大發達、大活動をなすべき露西亞國民に取りては餘りに上品なり、我等は更に寛濶なる衣を裁せんと欲すと。『露西亞及歐羅巴』の著者ダニレンスキ、最も深刻なる嘲罵的口調を以て露西亞が地理的にも歴史的にも歐羅巴ならざること論じて曰く――

『歐羅巴の善にも惡にも關係なかりし露西亞が如何にして歐羅巴に屬し得べき乎。真正の謙遜も真正の高慢も、露西亞が自ら稱して歐羅巴に屬すと云ふを許さず。優者の間に道を開かんとするは只た出生劣等なる「かけだし」もののみ。……されど或は云はん、露西亞は出生の權利により歐羅巴に屬せしむるも、採養の權利により屬すべし。彼は歐羅巴に仕立てたるものに自ら合せたり（或は、くなくさんと務むべし）、彼は歐羅巴の勞働に與り歐羅巴の勝利に與る。或は少なくとも之を試むべし。されど誰か採養の「こゝなせし乎。我等は、如何にしても歐羅巴、露西亞との關係に於て多くの父母的感情を有するを見る能はず。されど論點は其處にあらず。論點は此處にあり、此の如き採養は果して出來得べきものなる乎。長き間、自個の根により自個の地より吸ひたる自個の液により養ひたる有機物、他の有機物に接着し、其の液を吸ひ自個の根を枯らし、自活的植物より寄生的植物となり得べき乎。……されど議論の爲めに、假定せしめ、露西亞は出生によりては歐羅巴族ならざるも採養によりて然り。……總て歐羅巴の利害は露西亞の利害ならねばならず、歐羅巴の志望はまた露西亞の志望ならねばならず、彼の希臘は我等の希臘ならねばならず、我等は佛蘭西語に所謂 *Il faut les épouser* 彼等に嫁嫁せねばならず。我等は末節に於て佛蘭西或は伊太利、英吉利或は日耳曼と異なるを得べし、されど全林として歐羅巴即ち我等自身と我等は異なる能はず、遠く能はず、我等は

眞面目ならねばならず、一貫ならねばならず。

世界の舞臺に於て如何なる役目をか、歐羅巴は其の養子なる我等に擬する。東方に於て歐羅巴文明の輸送者となり傳播者となる事——これ我等に配せられたる天職なり、此の事業は歐羅巴の同情を表するものならん、其の祝福好意及稱賛を興へ以て我が人情進張者を奨励し悦喜せしむるものあらむ。甚だ可也。さらば東方へ。されど待て——東方とは何處ぞ。我等は土耳其より始めんと思へり。當時何物か之に如くものあらんや。其處には、血液を於て精神に於て我が同胞あり——苦痛の中に生活し救済を渴望せり。歐羅巴は乃ち叱して曰く「何處に行かんとする乎。汝は其處になすべき事業を有せず。其は汝の爲めの東方にあらず、其處には余が好むよりも多くのスラブの層あり、余は彼等を處置せん」とす。我が日耳曼人は曾て同様の事業をなしたり。速かに去れ」と。我等は高加索を捕らへたり——これまた一の東方也。母は狂氣の如くなれり、「敢へて自由の高士に觸るゝなけれ、汝若し彼等に干渉せば大なる報來らむ。放て」と。此度、我等が命を奉せず、歐羅巴主義を忘れたるは何等の幸ぞ。次で波斯、其處にも歐羅巴文明の種を蒔く方針に適する何等かの事業あるべし。日耳曼人は意に係せざるべし、彼の東方進漸はかく遠く達せざるべし、されど英國の爲めに我等は制止せらるゝに至れり。甚だ印度に近し。退け。——支那へ行かん乎——「否。汝が要するは茶なる乎。我等は汝が要する糖を廣東より汝に送るべし。支那は富國也——我等は汝の助を藉らして能く彼を敷ふ。彼は甘露の如く我が印度阿片を喫す——放任せよ」と。されど、希くは我等の東方は何處にある、我等の神聖なる天職として啓發すべき東方は何處にある。——「中央亞細亞、これ汝の舞臺也。忘るゝなけれ。我等は如何にしても其處に達する能はず、且つ勢力の報を得る能はず。其處に汝の神聖なる歴史的天職存す……」——此に於て我等は汗を流し血を流し、數百年間刻苦労働したり、我等は億億萬の人口を有する帝國を建てたり（其の中六千萬は我が人種、血統たり、支那を除くの外、世界に此の如き例なし）——只だ歐羅巴文明の幸福を、ユーカント、キマ、ホーカラの住民と二三百萬の蒙古蠻族とを合して、總計五六百萬の劣奴に贈らん爲めに、——これ亞細亞大陸の中心に歐羅巴の文明を輸送すと云ふ調子高き言句の到底の意義なれば也。——實に嘆むべき運命にして誇るべき天職。」

ダニレスフキーは嘲罵の衣を棄て嚴格なる調を以て斷言して曰く、

「かく、歩を譲りて、露西亞は生れて歐羅巴族たらざるも養はれて歐羅巴族となりしと假定したる後、我等は露西亞に單に巨大なる洗物たり、巨大なる歴史的發展たるのみならず、所謂唯一の世界——實は歐羅巴、即ち「チエートン、ラチン」の局部的文治の進歩及び擴張に對して積極的障礙、排除し難き障礙たりとの結論に到着する也。」

言、少しく激に過ぐるものありと雖、露西亞の天然の全く西歐と異なるを知り、其の歴史を知り、其の人種を知りたるものは、直ちに此の論の主旨を否決せんと試む能はざるべし。西歐が露西亞たる能はざる如く、露西亞は決して西歐たる能はず、其の利害に於て、其の文明に於て、其の天然に於て、其の歴史に於て、其の人種に於て、而して最も多く其の國民に於て。

露西亞は
歐羅巴に
能はず

第二、天然の奴隸。

人種、天然及歴史の國民に於けるは血統、家庭及經驗の個人に於けるが如し。一は國民の性情を作り、他は個人の性情を作る。或は人種に重きを置きて説をなすものもあり、或は天然に重きを置くものあり、或は歴史に重きを置くものあり。何れを重しとし、何れを輕しとするも皆な抽象的偏頗なるを免れず、只だ實際の情態によりて決すべきのみ。最も多く歴史に司配せらるゝ國民あり、最も多く人種に司配せらるゝものあり、最も多く天然に司配せらるゝものあり、一を以て他を律すべきにわらず。而して露西亞の如きは、其の國民的性情の最大部分を天然に負ふもの乎。

前に云へるが如く、露西亞國民は専制なる「ザール」の上に更に大なる専制者を有す。世界に於て露西亞の天然及氣候の如く強大猛烈なるものはわらず、虛無黨の陰謀は時として専制帝王の最大なる「ザール」を斃すことあるべし、されど世界最強の専制者たる露西亞の天

國民的性情及人種

露西亞の天然性情

露西亞の歴史と天然の關係

然に對しては、如何なる利器を有し、如何なる結合を有し、如何なる剛氣を有するものもよく敵せんと企つるなき也。虛無黨自身すらも、實に此の苛酷なる天然が産出したる糺子の一人に外ならず。歴史及文明の感化は常に人種及天然の勢力を制限し糺正す。されど前に云へる如く今尙ほ建國中なる露西亞は多くの歴史を有せず、教化を蒙らず。之を西歐諸國に用ふるも、未だ充分に天然の力を糺正し能はざる歴史は到底強大なる露西亞の天然を制限し、其の國民的性情に於ける感化を糺正する能はざる也。されば他の國民の性情を作るに於て文明宗教等に歸せらるべき功罪は、露西亞に於ては最も多く天然に歸せられねばならず。西歐諸國民は長き間歴史の底に養はれたる馴馬也。露西亞國民は今尙ほ「ステツプ」の空氣を呼吸する野馬たるべし。彼は果して麒麟の如き乎、將た驚馬の如き乎。

露西亞の天然が如何に露西亞國民を作りたるかを知らんと欲せば、先づ北方露西亞の地を旅行するを要す。モスコウを中心として昔時各種族の首部たりしトフェル、ヤロスラフ、ユストロマ、ウラヂミル、スツダル、リアザンの立てるによりて示さる如く、此の地方は露西亞國民の精髓たる大露西亞人の生育地なりき。大露西亞人は此地方に於て、徹頭徹尾

露西亞の天然

大陸的なる天然、單調なる地勢、激烈なる氣候、鐵を熔すが如き暑氣、水銀を凍らすが如き寒氣に育てられたり。

地球の上、同緯度若しくは更に高き緯度に位して、露西亞の如き酷しき寒を感じ、露西亞の如き長き冬に封せらるゝものはなし、酷寒の冬は露西亞の最も著しき氣候也。露西亞人の生活の大部分は此の冬によつて決定せらる。

(一) 遊怠なる習慣。モンテスキューは北方を以て活動、勇氣及自由のホームなりと論じたり。寒氣は先づ胃をして健全ならしむ。健全なる胃は健全なる身軀を豫定し、健全なる身軀は活潑なる精神的動作を豫定す。歐羅巴の歴史、亞細亞の歴史、皆な北方より起りたる人種が、南方に來りて居を定め、國を立て、文明の域に進み、奢侈安逸によりて腐敗し、次て北方より來りたる種族に亡ぼされ、第二に來りたるものも遂に文明化して北方の自由を好み、勇氣活動に富む第三の種族に亡ぼされたる事を説明せざるはなし。されど北方が活動、勇氣及自由のホームたるは適宜の度に於てのみ、最簡、最良の防寒法なる活潑の勞働がなし得らるべき程度に於てのみ。されど寒帯の寒は熱帯の熱と同様の結果を生ず。極

遊怠なる習慣

寒氣に強
健なる人

不順の氣
候に勞働

熱の氣候が植物をして枯死せしめ、動物をして睡眠せしむる如く、極寒の氣候は植物をして凍死せしめ動物をして整居せしむ。熱帯に於ける蔭、寒帯に於ける火、同様の恩恵にして同様の咒咀たり、人をして骨弛み、氣鈍らしむ。露西亞の地、其の大部分は温帯の緯度に位するも、冬は寒帯に近き寒を感じ、夏は熱帯に近き熱を感じ。寒帯に近き寒氣猶ほ多少の利益なくんばあらず、露西亞村落の婦女によつて製作せられ、佛蘭西の巧手によつて摸倣せらるゝ花模様レースは此の冬の賜也。全國を通じて、最も直徑にして最も平坦なる運搬路を農夫に供するは此の冬の雪と霜と也。されど激烈なる氣候の變化は、勞作をして大なる不便を感じしむ。露西亞人をして最も不便を感じしむるは冬より夏に至る變遷の時節也。一日の氷解により滿地汚泥となると見れば、次の日は再び堅氷となり、凍りて解け、解けては凍り、最も不順なる氣候二三月に亘ることあり、寒熱の往來二十度を過ぐることあり、住民をして戸外の勞作をなす能はざらしむ。されば露西亞人民は永き冬の間は遊び、短かき春の間は動かず、夏の日の半は暑を避けて眠り、激烈なる天候に其の勞働の運命を托せざるべからず。彼等の國民的詩人をして『何故に汝は眠る乎、ムーサーン』と

諸はしむる遊怠の習慣は、永き間、活潑なる労働を禁止する天然の呪咀と云ふべき也。勞作なき冬期の遊怠を防ぎ、また寒氣を防ぐ健全の方法は活潑なる運動に如くはなし。露西亞の寒氣、寒帯の極寒に近く、長き間、勞作を禁止するも、未だ全く戶外の運動を禁止するに至らずと雖、勞作を禁ぜられたる露西亞人はまた自ら運動を好まず、かゝる國に於て最もよき運動たる氷すべりの戯を好むものすら甚だ多からず、かゝる國に於て最もよき娛樂たる饗宴に於て、農夫の最も樂しとするは椅子によりて眠むるが如く休むにあるが如しと旅行者は語る。

(二)粗惡なる食物。北方に住むものは南方に住むものよりも豊富なる食物を要す。寒氣が齎らし來る生理上第一の結果は呼吸を急迫ならしむるに在り。呼吸の急迫は血液の循環及コンパネーションを迅速にし、其の結果として胃に於ける豊富なる食物の需要を増進す。故に緯度の上るに隨ひ人は肉食を嗜み、炭素及窒素に富む食物を求む。酷寒はかく人をして豊富なる食物を要求せしめながら、地をして豊富なる食物を産出せしめず、人をして最も多く天運の不公平に苦ましむ。而して世界の舞臺に名を知られたる人種の住家として、露西

亞殊に其の北半の如く氣候の酷寒なるはなく、地味の瘠寒なるは稀也。耕して麥の發達を便せず、拓きて獸畜の生育を許さず、住民は昔より最も貧寒なる食物によりて育てられたり。貴族より小民に至るまで常食として用ひらるゝは稗麥の麵包と酢づけカペーのソーブ及パツクホーイートを焼きたるポルリツヂにして、副食物として用ひらるゝは乾茸及凍魚或は鹽魚あるのみ。富めるものは固より之に肉を加味して富める食物となし得べきも細民は然らず、農奴解放以來、幾多の進歩ありたる今日に於て、尙ほ一週一度の肉を味ふに過ぎず。茶は露西亞人第一の飲料として、如何なる貧賤も眞餘の茶瓶を備へざるものなし。水質惡しき地方に於て此の嗜好は少なからぬ便を興ふと雖、未だ貧寒なる食物を助けて寒氣に敵するの力を有せず、此に於てウオトカと稱せらるゝ焼酎によりて補はる。アルコールの使用は寒氣と正比例をなして増加すと一般に信せられたる如く、露西亞人は泥醉人種の汚名を蒙れり。統計を案ずれば露西亞人は平均驢馬人の如く多く飲まず、或は英國人、獨逸人、佛蘭西人よりも少なきことあるべし。されどこれ露西亞人の飲を好むもの少なきにあらず、多く飲むに足る錢囊を有せざるに過ぎず。されば飲み得べき時は必ず飲み、

時としては飲み得べからざるの時に於ても飲み、飲めば必ず泥酔するを習慣となす。農民と同じく錢囊輕き職工が亂醉を以て習慣となすは更に甚しきものあり、上等社會、著者美術家に至りては最も甚しきものあり、一時の融通を頼みて、遂に生涯の破滅に至るまで飲むもの滔々として皆な然り。酷烈なる寒威、單調なる天然、無聊なる生活をなす露西亞人に取つて、飲酒は唯一の散鬱者となりし也。されば或るものが露西亞は飲酒によつて負債を償却すと戯れたるが如く、酒税は政府歳入の重要な部分を占む。アレキサンドル二世の後半より、課税増加と精神教育の結果とは、多少此の悪習慣を減じ、アレキサンドル三世は即位最初の事業の一として、禁酒會議を召集したりき。食物の不足は身體の活力を減じ、労働を減じ、労働の減少は生産を減じ、生産の減少は更に食物の不足を來し、因果循環、遂に遊逸の習慣によつて營養の不足を補ふの外なきに至らしむ。之に加ふるに多量の飲酒を以てす其の結果語るを待たざる也。

健康の不健全

(三) 家居の不健全。酷寒を防ぐの家室は甚しく神経を刺激する不健全のものとなる。戶外の空氣愈々寒く愈々軽く愈々清くして、室内の空氣愈々温く愈々重く、愈々汚れ、市民は

空氣不潔

二重窓を密閉したる室内に最も好む熱帯の植物を培養するに足る熱度を作り、農民は肥料桶の外壁を築きたる木小屋の大暖爐の前に一家の老幼兒女を密集し、夜は其の上に群り寝ね、曾つて代謝せられざる停滞の空氣を呼吸す。時に新鮮の空氣を呼吸せんが爲めに戶外に出づれば寒氣朔風腐を刺くが如し。かくの如くして毎日、熱帯の如き室内より寒帯の如き戶外に出でまた熱帯の如き室内に歸り、四十度乃至五十度の差を感じ、最も腐敗せる空氣より最も新鮮なる空氣に出で、また歸りて最も腐敗せる空氣を呼吸す。急激なる轉環、神経を刺激すること甚しく、健康を害すること甚し。

衣服の不潔

(四) 衣服の不潔。二十八年の征清軍は遼東の野に於て支那人の不潔に驚きたり。誰か知らん、悉比利亞の野に於て、東歐の野に於て、露西亞人の不潔に驚くべき時の來らざるを。防寒は不潔を伴ひ來る。長き間密閉せられて風の入るを許さざる家屋は空氣の不潔を來し、塵埃の堆積を來し、空氣の不潔、塵埃の堆積は熱度と共に床虫、虱、蚤の如きあらゆる不潔昆蟲の發生を促がす。若し夫れ春暖の候に至らば、長き冬蟄の間、窓外より棄てられ、霜と雪との墓に葬られ白く塗られたるもの、總て融解し、總て蘇生し、總て腐敗し、滿地

汚穢

泥となり糞となり、靴に着けられて室内に運び入れらる。露西亞の氷解は實に世界第一の不潔なりと實見者は語る。其の悪疫、傳染病の巢窟たる當さに然るべき也。而して密接の關係を身軀に及ぼすは衣服の不潔也。寒地に住むもの皆な然るが如く、憐れなる露西亞の農民、寒を防ぐ爲めに多くの衣を襲ねざるべからず、輕き財囊を以て一たび重き衣を襲ねては、更らに豫備のものを得る能はず、晝も夜も、長き冬の間、同じ羊皮——チュルツアを着て生活し、其の褌衣さへも一枚の外、代ふべきものを有せざる多し。若し宗教の儀式として一週一度土曜の夜の熱湯浴をなさねばならぬと定められたるものなかりしならば、露西亞人は支那人に劣らざる不潔の人民たるべし。而も各村必ず一の浴場を有し、各人一週一度の沐浴をなすも、直ちにまた汚臭に染み、汚蟲の群かれる同一の衣を着することによりて沐浴の効を減す。

(五) 娛樂の淫猥。閑居は多くの不善を齎らし來る。野卑淫猥のことは冬期に於て、閑居に於て、密室に於て行はるゝこと最も多く、行ふこと最も易し。露西亞の長き冬は飲酒、舞踏の時節として、貴族、富者は永き夜を晝となして、蝶の花を追ふが如く淫樂を追ふて狂

ふ。下民は勞動すべきことなく、家族と共に室内に閑居し、遲鈍、散漫なる起居をなして徒らに情慾を熾らしめ、夜は父子、兄弟、長幼、男女、廣きストロアの上を共同の寢臺として眠り、野卑淫猥云ふに勝へざる猥行をなすべき機會を與へらる。此の如くにして家庭の禮節、貞操汚され、男女間に保たるべき羞耻の念殺さる。旅行者は夏の土曜日ドンに於てドン及ポルカ附近の町村に於て、往々、老少既婚未婚の婦女の一群か、一片の布をも着けず、裸軀にして往來最も繁き橋の下に遊び狂ふを見ると云ふ。所謂北方の民は情冷やかに、感鈍きもの乎。

(六) 疾病。此の如き酷烈なる氣候、此の如き粗惡なる食物此の如き不潔なる住居及衣服、此の如き淫猥なる生活が、露西亞人の健康、生命に及ぼす結果云ふまでもなし。總てのもの撞着矛盾を以て充たさるゝ露西亞は生命統計に於てもまた同様の撞着矛盾を示す。露西亞は最も多くの長壽者を有し、而して最も短かき平均生存期を有する國の一也。壹百萬の人口を有するノブゴロットの州に於て百歳以上の死亡者千八百七十一年の一年間に三十九人ありたりと記され、全國「オルンドツクス」教徒の千八百七十五年の過去帳には百歳以

上のもの二百六十二人ありたりき。此の如く多く長壽者を有する全露西亞を通し三十五歳以上に達したるもの、数は比較的佛蘭西よりも少なく、六十歳を踰へたるものに至りては、佛蘭西に於て千中の一百なるもの、露西亞に於ては千中の五十に過ぎず。小兒の死亡數に至つては最も甚し。最も不完全なる保護によつて、最も激烈なる氣候を凌ぎて發育せんことは、扁舟に乗じて北海の怒濤を渡るが如く、尋常以下の小兒に於て出來得べきことにあらず、只だ最も強健なる出生を有するもののみ辛ふして險絶艱絶の生活に入門す。或は之を以て昔時のスバルタに於けるが如く、最も強健なる適者のみを残して羸弱なる總のものを淘汰し、一人の弱卒なき剛團躰を作る所以なりと速断するものあるべきも、露西亞に於ては然らず。最も強健なる出生を有し、小兒時代の難關を越へて發育したるものも久しからずして氣候、食物、生活、不潔の爲めに弱められずんばならず。數年にして花崗石を蝕し碎く露西亞の不順激烈なる氣候に對しては、如何に硬き骨も肉も物の數にはあらずぬ也。天然痘、フアオイド熱、フェルペラル熱、デフテリア其他の流行病は自由に害惡をなし、スクロフラは露西亞の持病として知らる。身材堂々六尺に餘るもの少なからず、鬚

鬚純白、百歳を踰ゆるもの少なからざる露西亞人は健康、力量に於ては寧ろ見かけ倒しの人民たらずんばならず。

第三、天然の苦闘者。

露西亞人の露西亞の地に住むや、愛子の如くにあらずして繼子の如く、ホームに於けるが如くにあらずして敵陣に於けるが如く、快樂の生活にあらずして戦闘の生活也。彼等は常に天然を敵として戦はねばならず、未來永劫全く驅逐し得ざる敵と、日夜間斷なき短兵急の接戦をなさねばならず。彼等は一日も敵を忘ることを許されず、一日も戦を休むことを許されざる也。

到底征服し難き優勢の勁敵と不斷の戦争が劣者に與ふる最初の教訓は忍耐也、退讓也、服従也。露西亞人は天然及氣候との争闘によりて受動的勇氣、消極的精神、忍耐及惰性の力を養成せり。露西亞人の如く苦痛を忍び得るものなく、露西亞人の如く死を忍び得るものなし。意義なき一場の角闘に於てさへも、彼等は單に力量及技倆を以て勝敗を分つのみならず、また忍耐を以て標準の一となし、敵手を撃ち倒したるもの勝者とせらるゝのみならず、苦痛降伏の聲を發せずして最も酷しき打撃に堪へたるものもまた勝者として稱賛せらる。『ザール帝國及露西亞國民』の著者アナトール、ルロア、ポリエー實見を記して曰

苦闘の生

耐苦力

『余が初めて露西亞農夫を見たるは千八百六十八年三月、斷食節の始、パレスチンに於てなりき。余はベツレヘムより程遠からぬソロモン池の岸に天幕を設け野宿してありき。此夜は、殆んど例年の此節、シリヤ地方に於て起る暴風雨に荒されたり。我等は手に杖を携へ、布の袋と木の椀の外、何等の旅具をも負はずして聖場を旅行する露西亞巡禮の一群の來るに合せり。彼等は皆農夫なりき、中には男子あり婦人あり、老年のものも多かりき。遠路長程の辛苦に疲れ、或は我が天幕の傍に、或は敗壁の下に雨を避くべき地を求めつゝありき。天明に及びて彼等はベツレヘムの希臘寺院に歸らんさせり、其の道程數哩に過ぎざりしも、寒氣と疲勞とにより彼處まで達し得ざるもの往々にしてありき。彼等力盡きて地に倒るゝも、他のものは顧みず、彼等自ら棄てたる如く彼等を棄て、過ぎ行けり。我等もまた馬上に凍へ疲れ、ベツレヘムのラチン寺院に行かんまで彼等と相接して進めり。かくて余は二人の農夫が、降雨を受けて小川となりたる道路の石上に倒れたるに合せり。余が彼等を扶け起し、酒精を與へて力を附け、馬に乗せ上げんを試みたるも益なかりき、彼等は死を決したるか如くなりき。其朝男子一人婦女二人かくの如くして路傍に倒れ葬られたり。』病床に於て、戰場に於て、刑臺に於て、露西亞人は遺言により辭世により未練を残すが如きことを笑ふ也。シリミア戦争に於て露西亞の兵士が、南方「ステツプ」の茫漠たる草野を渡り、云ふべからざる困難疲勞によりて、路傍に倒るもの數百數千なるに至りても、一の怨言歎聲を發せざりしもの、またバルガン半島の諸戦に於て、寒熱飢餓の極に堪えたるも

の、此の忍耐、決死の性情によらずんばならず。露西亞の兵士は世界に於て、困難に耐めるの力最も大なるものなり、此點に於て露兵と競争し得べきは、實に水火の敵たる土耳其人あるのみ。彼等既に、決して排除すべからざる天然の壓抑を忍ぶ。豈に分量に於て、時間 に於て限ある人の壓抑を忍び得ざらんや。「ザール」の專制の如き、露人の肩の上には鴻毛 よりも重からず。

温和なる天然のキスによりて育てられず、苛酷なる天然の鐵鞭によりて育てられたる露西亞人は最も深刻なる性質を有するものとして知られたり。一たび思ひ一たび企つることあらば、彼等は終極まで達せずんば止まず。極端にして深刻なる彼等に取りては、退讓と云ひ調和といふものは、如何なる讓歩にても如何なる調和にても、直ちに不正となる也、少くとも卑怯となる也。萬々一露西亞に革命の起る如き時來らば、九十三年の佛蘭西革命、斷頭臺、恐怖時代と雖、其の慘酷なる點に於て顔色を失し却走するに至らむ。著名なる歴史家ユストマロフ、國民的歌謠により此深刻なる性情を指摘して曰く、

『彼等の歌謠に於て、意志の勢力は高尚にして詩歌的性質を裝ふ。……大露西亞人の歌謠の最上乘なるは、勝利の

標號として、將た内部の勢力まで破碎せられざる敗亡の標號として、越ての勢力を中集する心靈の運動を語るものにあり。

近世西歐の文學に新生命を與へたるは深刻なる露西亞文學にあらざるや。

深山にも望花あり、深淵にも眞珠あり、手の觸るゝことを許さざる栗の殻も、其の中には最も美味なる實を藏すとせば、深刻なる露西亞人の胸中にも、一點の温光なからずや。彼等は同情に富む人民也。腥々を腥々を知り好漢は好漢を知る如く、困難と戦ふもののみよく困難と戦ふものを憐み、逆境に立てるもののみよく逆境に立つものを憐むを知る。曾つて逆境に立ち總てのものを敵として戦ひし時に於ては、同情を以て、知己を以て人を遇し、漸く順境に立つに及んでは、詰責を以て同情に代へ、權威を挾んで知己を遇するもの、滔々として皆是也。露西亞人は常に排除すべからざる困難と戦ひ、常に回復すべからざる逆境に立つの苦痛を知る。故に自己の苦痛を以て隣人の苦痛を推し、これに同情を表し、これを救済せんことを欲す。友誼、親愛、惻愍、慈善、これ國民的性情として深刻なる露西亞人の胸中に藏められたる温光也。彼等は『憐れなる不幸者』と名つけて獸類にまで同情

を及ぼすに至る。千八百十四年の佛蘭西戦争及クリミア戦争に於て、露西亞人は最も寛大なる敵なりき。彼等の中には、梅花を箴に挿むて戦ひ、赤子を抱きて、指揮する勇士を見ることがも難きにあらず。彼等露西亞人は滔々たる大河の如し。其の平坦なる野を流るゝや、最も静かに、最も平らかにして動かざるが如し、されど一たび峻仄の地に來れば、激波怒濤岩を碎き天に漲るの觀をなす。何等かの障礙、前に當るあらば、彼等は直ちに天然との争によりて敵へられたる戦争の教訓を實行して、少しも假借することあらず。彼等の建國史は、彼等に與ふるに最も耐久なる防禦者たる名を以てし、彼等の膨脹史は、彼等に與ふるに最も慘酷なる征服者の名を以てせり。敵としては最も憎むべく友としては最も愛すべきもの、個人としては最も親しむべく團體としては最も恐るべきは露西亞人にあらずや。戦争の術を教へたる天然はまた降服の術を教へたり。猛烈なる天然と不斷の戦争をなし、到底勝つべからざるを知りて最も苛酷なる壓抑を忍ぶ露西亞人は、成效の望なき抵抗をなすを欲せず、勝利の望なき侵襲をなすを欲せず。彼等はよく戦ふことを知り、よく避くることを知る。モスコウに於て常勝ナポレオンの雄圖を破りたるは、此の矛盾的性質を備へ

たる露西亞人にあらずや。

寒氣及征服すべからざる天然との戦争はまた露西亞人、特に大露西亞人に著實なる實驗的精神を與へたり。總てのものに於て最初の目的を知り、總てのものに於て生活の實在を知り、直覺を有し、手段に富み、方途方便を發見するに捷く、人及物を處理するに巧なること露西亞人の如きは多くあらず。風習、政治、文學、宗教總て此の傾向を表示せざるなく、此の傾向によつて司配せられざるはなし。彼等は最も多く物理學、生理學、社會學を好み、最も多く心理學、哲學、形而上學を嫌ふ。常識は露西亞農夫の最も尊重する性質也。露西亞の歌謠に抽象の傾向を示すものなく、露西亞の文學に固有の「ローマンチズム」なし。プシユキン及レルモンソフの天才ありしと雖、西歐よりの輸入を待たずして、「ローマンチスト」たる能はざりき。而して此の「ローマンチズム」は久しからずして純然たる實際派、自然派の文學に地を譲り、ポポリキンが尊稱して「自然主義のハーキール」と云へるソラの作は、佛蘭西に於けるよりも多くの讀者を露西亞に於て有す。實行的精神の走る所、乾酪の一片はプシユキンの作に優ると云ふものすらありき。

第四、悲觀的にして實動的。

人の性情を知るより難きはなし、總ての學は之を説かんが爲めに組織せられたり。國民の性情に至つては更に複雑なり、更に難問也。即ち難しと雖、楯の一方の面を説かんと試みたる以上は、他方の面をも試みねばならず。露西亞の天然が、氣候、食物、習慣によりて露西亞人の血肉に及ぼしたる感化を見、必要を喚起し、能力を刺激することによつて露西亞人の性質に及ぼしたる感化を見たる後、乞ふ其の如何なる風景を描き如何なる感觸を與ふることによつて露西亞人の想像及心靈全體に如何なる働をなすかを觀察せしめよ。

露西亞の風景は悲寥也、故に露西亞の人心は悲寥也。若し露西亞人にして社交を喜び、旅行を喜び、飲酒によつて鬱を散することをなさざりしならば、彼等は悲寥に堪へずして死せしならむ。

フルチェンは露西亞の歌謡を稱して『響ある涙』と云へり。實在の地に悲哀の影を描きた

る露西亞の歌謡を以て、隅より隅まで喜ばしき日光に照らされたるチーブル或はシ、リーの歌謡に較ぶれば、兩極の差も此の如く多からずと思はるゝならむ。更に彫琢を用ひたる文學及詩に至つては、更に激しく曾つて慰むべからざる悲哀に充つ。レルモンツフ及プシユキンよりチクラソフ及チウチエフに至るまで、總ての流派の作詩、殆んど總て悲哀ならざるはなく、皆に作詩其物のみならず、作者其人の生活、殆んど總て悲哀ならざるはなし。

『悲哀、懷疑、諷刺——これ露西亞詩歌の三稜線也』と云へるヘルチェンも其の例に漏れざりき。天然及氣候に刺激せられ、政治及制度に助長せらるゝ此の悲哀は、概して教育ある上流社會に於ては神秘主義を來し、時としては實在主義を歴し、時としては實在主義と奇怪なる結合をなす。ニコウスキ、ゴゴル、ドストエフスキ、トルストイ等の著作は其の實例也。而して他方に於て此の悲寥は概して下流社會をして知らず識らず冷靜なる運命主義の徒たらしむ。彼等は遊戯に於て、饗宴に於て、群集に於て、天然か最も饒かに與ふる雪の如く冷にして靜也。

露西亞の天然は二の反對する性質を有す、即ち廣大にして而も貧寒なること——大なる空

間ありて之を充たるものなきこと——大なる面積に形の變化もなく色の變化もなきことなり。北宗の畫は屹軀傲牙なる北方の風景より來り、南宗の畫は平靜優美なる南方の風景より來れり。何處に於ても北方は豪壯不羈の天地として知られたるに、獨り露西亞のみは、白浪天に跳るの岸を有せず、絶壁倒に懸るの島を有せず、奇巖怪石の灣を有せず、氷河を有せず、大瀑を有せず。南部に南方の優美なれば北部に北方の豪壯なし。同調の行路、同様の風景、露西亞を旅行するは太平洋を航行するが如し。夕に見たる風景は朝に見る風景に異ならず、船は漫々たる大洋の中心に在りて動かざるが如く、車は漠々たる平野の中心にありて進まざるが如し。僅かにキエフ、ノブゴロット、フスコフ、カザンの舊き壁、彩られたる塔か、湖に沿ひ河に沿ふて少しく峙へ立つを見るのみ。ドニエプル、ドン、ボルカの諸大河、其の大なること他に比なしと雖、其の流餘りに緩に、其の山餘りに低く、雄大の感少しもなく、却て可笑の感を喚ひ起す。總て露西亞の風景、其の水平面餘りに廣く、其の直立面餘りに低く、對照の趣なく調合の妙なき廣大は人をして只た遲鈍の感に堪へざらしむ。旅行者は僅かに寂寥たる森林の中に靜かに堪へたる湖水、融雪の力によりて

穿たれ、蜿蜒として「ステップ」に蟠る渠溝の景を賞し得べきのみ。變化なく高低なき此土地は、氣力なく變化なき植物によりて蔽はる。到る處同様の土地は到る處同様の動物、到る處同様の植物を育て、天然は到る處同一の調を繰返す。北部の森林、南部の「ステップ」、其趣は異なれども、森林には森林の外何もなく、「ステップ」には「ステップ」の外何もなく、森林には、小さく短かく瘦せ衰へたる樹の薄き影を裸地に落すのみ。趣もなく直立せる松の赤き幹にあらざれば、枝細く葉小さきバーチの白き幹を見ねばならず。「ステップ」には強健なる春草、數週にして枯れたる後は、茫々たる沙漠の残るあるのみ。耕野に變化少なきは森林の少なきよりも少なし。人の手は他の國に於て然るか如く、遲鈍なる露西亞の地に生色を興ふる能はず、變化を興ふる能はず。同様の田園に同種のもののみ培養せられ、同時に發育し、同時に成熟し、同時に刈取られ、千里同調、丘陵の區畫するものなく、茅屋の點綴するものなし。此の如く廣大にして貧寒なる天然、生氣なく生色なく遲鈍なる風景は、宕落なる想像力を刺激する能はず、露西亞人をして、印度の如き廣

大の天地に住みて印度の詩の如き不羈の想像を逞しくするを得せしめず、茫漠たる夢想の中に彷徨徘徊せしむ。大露西亞人の如きものにして、文學詩歌の嗜好少なく、崇高なる文學詩歌を有せざるあらば、此の如きの天然、彼等をして然らしめたる也。

此の如き廣大なる天然は、人をして自個の甚だ小なるを感ぜしむ。西方より來りて際涯なき大地の中に没し、森林に入れば森林の外何も見る能はず、「ステツプ」に入れば「ステツプ」と天との外、何も見る能はず、湖沼に遇へば、其の數を計ふる能はず、其の積を量る能はず、河流に遇ふも橋梁を以て其の廣袤を充たす能はざる露西亞の殖民は、渺たる蒼海の一粟、天然の無窮を歎じ、自己の微弱なるを悲まざるを得ざる也。而して此の如き貧寒にして變化なき天然は、其の廣大に打たれたる人の悲寥を慰むるの術を有せず。露西亞の農民にして遠く離れて獨り森林の中、或は「ステツプ」の中に住む能はず、部落を好み、組織を好み、財産共有を好むものは、際涯なき天然に對する恐怖よりして然るにあらずとせんや。かくせざれば彼等は寂寞、悲寥に堪へずして死することあるべき也。

露西亞の土地は固より愛好すべき住家にあらず。日本の如き好風景、好氣候、好地質を以

渺たる蒼海の一粟

部落を好み組織を好む

移住を好む

て露西亞の如きに比せば、一は樂土の如く他は火宅の如し。始めより樂土に住するものは樂土の外に出づるを欲せず、始めより火宅に住むものは火宅の外に出で、樂土に到らんことを欲す。一の願望は消極的にして他の願望は積極的也。始めより樂土に住して現在を樂しみ積極的願望を有せざるもの誇るべき耶、始めは火宅に住して將來を樂しみ積極的願望を有するもの悲しむべき耶、歴史は之を證明するの時あらむ。天然の寵子たる日本人が餘りに多く天然に愛好せられ秘藏せられて移住心を全く消磨し去りたりとすれば、露西亞人の移住を好み、遊旅を好み、冒險を好むものは、天然の繼子として、常に虐遇せられ放棄せられたるが故ならむ。

天然と制度との外に露西亞人をして旅行的冒險的ならしむる一の理由あり。火災は花なき露西亞の花なりき。歴史家ソロウイヨフが西歐を名づけて『石の歐羅巴』と云ひ、東歐を名づけて『木の歐羅巴』と云ひし如く、森林と原野とのみなる露西亞に於ては、貧者の小屋も、富者の高樓も、學校も、寺院も、村落も都會も(近年まで)木材を以て建てられたりき。一家火を失すれば一村焼け、一人財産を焼失すれば、全市財産を焼失し、誰人も其

の存生の間に於て、必ず一度、或は再度、三度、家を失ひ産を失ふべき運命を有せり。必ず焼失すべきものと定められたる時に於て、誰か安んじて家屋を營むものあらん、好んで家室を飾るものあらん、一定の住居を愛好し、之れに固着するの機會を有するものあらんや。農夫の如きは柱傾き檐落ちんとするも意に介せず、其の倒るを待ち焼くを待つ。されば露西亞人は此點に於ては、武士に壓抑せられ、交々大地震、大火災の爲めに、財産を失ひ、生命までも脅やかさるゝ江戸見が「宵越の金をつかはず」と云ふ喜劇的悲壯劇の人物となり、冒險より冒險に日を送りしが如き也。加之、森林亂伐以前に於ては、誰人も皆な一挺の斧を有すれば直ちに大工となり、數週ならずして數室を有する家屋を建つること、旅行者が天幕を建つるよりも容易なりし也。されば露西亞人は木造の天幕を負ふて旅行する人民として、到る處、風景氣候、地質の異ならざる故郷を見出し、早くより移住的、冒險的嗜好、『半開遊牧的嗜好』を養成したりき。概して北方の人種は南方の人種よりも移住的也。英國、獨逸、スカンダナヴィアの如き、國內に住すべき地を剩しながら、尙ほ年々多くの移住者を亞米利加に送る。露西亞人は宗教、制度、迷信に束縛せられて其の國を離る

ことをなすと雖、其の廣大無邊の版圖は彼等に最も自由なる移住地を與ふ。爲政者若し之を許さば彼等の過半は好んで「ユサク」となりしやも知るべからず。農民をして一定の土地に固着せしむるサーフドム制の立てられたる一理由は、道德、秩序、經濟の敵なる此の移住的性情に對する豫防策なりしと歴史家は論ず。移住傾向と根を同くする冒險的傾向の最も著しく現はれたるは哲學、宗教、社會學等に於て也。露西亞の思想に限界なきは其の土地に限界なきが如し。順序を飛び越へて一直線に走り、極端に達し背理に陥るを厭はず、論理の終局を望み、絶對を好むこと佛蘭西人の如く、而も佛蘭西人の如く實地實驗の念によりて制御せられ矯正せらるることなし。されば思想界に於ける甚しき大膽と實際界に於ける甚しき怯懦とを兼ね、一方に於て退くとなき性情と、他方に於て進むとなき性情とを兼ねたる奇怪の結合を露西亞人の中に見ると常也。若し夫れ露西亞人がインヂヒデアリチー、オリヂナリチー、創作的能力を欠くと稱せらるゝに至つては、又此變化なく生氣なく慈愛なき單調一樣なる天然の教育によると少なからざるべく、また彼の生氣なく興味なく慈愛なき歴史の教育によると少なからざるべし。

運鈍にして單調なる露西亞の風景に飽きたるものは變化活潑なる露西亞の時候に驚かざんばならず。此の最も活潑なる時候は單調なる風景に驚くべき變化を與へ、兩者相待つて最も複雑なる、極めて矛盾せる感化を露西亞人に與ふ。南方の天然は四時日光に浴し蒼々として生色あれども、四時蒼々たるの外、多くの變化を呈せず。季節の轉換により、全く變じ常に新なる天然を見るは北方住民の最大恩恵也。特に露西亞の如き大陸的地方に於ては此の變化最も活潑にして天然の運鈍單調なるを補ふ。露西亞の住民は一步も動くことなくして六ヶ月の間に熱帯より寒帯に旅行し、夏は赤道の氣候風景より冬は北極の氣候風景に至るまで坐ながら賞翫し、熱帯の住民の如く、温帯の住民の如く、寒帯の住民の如く勞働し、娛樂し、飲宴するを得べき也。されば露西亞人の住家を知らんと欲するものは單に天然の風景を見るを以て足れりとすべからず、更に重きを季節の轉換變化に置くを要す。

露西亞の時候の中、冬は最も長期にして最も生色あるもの也、其の單調なることもまた一種の美觀を添へずんばならず。世界の裝飾の中、最も冷に最も大に最も美なるもの雪の如きはならず。茫々たる大地、山もなく、谷もなく、河もなく、道もなく、野もなく、只だ大なるウヤリを残すのみ。總てのもの、醜なるものも醜ならざるものも、純潔なる一様の白衣を以て裝はる。滿目一様の皚々、而も單調ならず、曇れる時は曇れる空を寫して、慘憺たる風景、悪鬼の眠るが如く、晝は日光を受けて最も豪壯なる光を發ち、見るもの、目を眩し、夜は月光に浴して最も優美なる光を發ち、見るもの、心を碎き、靜なるときは三軍の堂々肅々として進むが如く、暴れたる時は萬馬の叫喚奔騰して戦ふが如し。空林枯木一朝にして華さき、平野は最も柔らかき天鵝毛を敷きつめたる花園の如く、茅屋は宮殿の榮華を飾り、高塔は「ファロ」の異彩を發つ。月なき夜は、星の光、一層の輝を添へ、月なく星なき暗の夜は、白き雪のみ獨り光を吐き、天は地の如く、地は天の如し。冬は最も樂しき候として、夜は最も樂しき冬として、大都の公子貴女は毛皮に包まれて劇場を出て舞踏場を出て、三頭の橋に鞭ちて郊外に去り、靜夜、鮮氣を吸ふて疾馳するの三快を合せ、僻

村の田夫野娘は相會して小宴を開き、且つ暗く且つ明かなる篝火の下に且つ聞き且つ語る。橇、車、馬、總て珠を轉ずるが如くに馳せちがひて少しの音もなく、目は最も活潑なる運動を見て、耳は最も靜肅なる休止を感じる都會の運動は人をして狂殺せしめ、初戀の情人、新婚の夫妻、相携へて歌ひ相擁して躍る村落の團樂は人をして惱殺せしむ。

冬の終、春の初に於て最も遲鈍なる最も不快なる季節來る。地は汚穢の海となり、空氣は腐敗の墓となり、長き冬の間拋棄せられ堆積せられたる總ての汚穢、總ての腐敗、潔白なる氷雪の外衣を脱し其の真相を暴露し來る。總ての天然敗壞するが如く、解體するが如し。而も此の解體より出で來りたる新天地の新鮮なる生氣に比すべきものはあらず。露西亞の春は、豫言者の杖の如く、一たび觸れて忽ち地を蘇らしめ、水を蘇らしむ。百五十日乃至二百日の間、毛の如き雪の床に眠れる地は忽然として醒め、蒼々たる新衣を着けて出で、死せる海は忽然として蘇り、白帆をかざして躍り、湖は天使の如く笑ひ、河は情人の如くさゝやく。森は再び青葉に繁り、野は再び青草に戦き、昨日は雲雀、今日は燕、相伴ふて樂土の春暖を其の羽に帯びて歸り、總ての天然一時に生れ一時に活く。されば

露西亞人の如く春の歸來を歓迎するものあらず。降るは雪のみなりし長き冬過ぎ行けば、最初の雨滴さへも、遠き昔より傳へたる歌を唱ふ小兒に歓迎せらる。『來れ、春よ、美はしき春よ、快樂と共に來れ、高く生ひたる麻と澤山の穀とを齎らせよ』の歌早くより丘の上に於て檐の下に於て唱へらる。或は奇怪なる春乞の儀式饗宴をなし、或は基督の蘇生と合せて春の蘇生を祝す。五月一日は露西亞一般の休日として、老幼男女相携て野に出で森に遊び、ノアの箱船より放たれたる鴿の如く、各々冬の全く去たりたる證として若木の芽を摘みて歸る。天地のみならず、人もまた遽かに若返りたるが如し。『神よ感謝す、爾の僕を恵み再び爾の春を見るを得せしめたるを』と云へる老人ありしを聞けりとゼナイード、ラコヂンの記せる如く、長き冬の蟄居の後、再び春に遇ふは特殊の恩寵の如く思はるゝ也。露西亞の春は甚だ短し、而して此の短かきとは其の快感をして更に深からしむ。冬の長き夜去りて日は一日毎に長く、植物は日と競争して、洪水の平原を浸すが如く生長す。蒔きたる種直ちに膨脹し、僅に六週日にして萌し、生ひ、色つき、熟するを見る勞働者の喜何を以てか喩へ得む。

夏は勃々たる熱帯の生氣を露西亞の地に運び來る。夏の晨の如く新しくして快よき晨はなく、夏の夕の如く涼しくして快よき夕はなく、夏の水の如く、夏の蔭の如く冷かにして快よきはなく、夏の空氣の如く乾きて美はしきはなく、夏の天空の如く晴れて色よきはなく、夏の暑熱、愈々酷しくして夏の快感愈々深し。晝は最も長く、夜は最も短かき此地の夏にあつては、淡き眞珠の如き夕の色、まだ西の空に残る間に、燃ゆるが如き深紅の晨の色、既に東の空を染め、中天は曙にてもなく黄昏にてもなく、晝にてもなく、夜にてもなく、曙の榮と黄昏の香を合せ、其の光、其の色、到底我が地球のものならず。如何なる巧手も之を寫さんとしては、筆を抛つの外なからむ。サント、ペテルブルクの緯度に於て六月の終に至れば、殆んど夜を知らず。アルキヤンゲルスに於ては中夜尙ほ太陽を見る。

餘りに多く神經を刺激する夏の美景、其の絶頂に達して、日は延ひたる時と同一の速度を以て一日毎に縮み、夜は一日毎に延び、夜漸く長くして黄葉の秋來る。美しき春を有するものは美しき秋を有す。春と生ひ夏と繁りたる森林の葉、「ステツプ」の草、長き春の日に於て吸ひ、更に長き夏の日に於て吸ひ入れたる日光を吐き返し、黄、紅、紫、あらゆる色に、空を染め、水を染め、土を染む。日は益々短かく、次て葉落ち、次て鳥去り、次で雨來り、次て最初の霜置きて朝日に消ゆるに至りて、清寥の氣骨に徹る。

天然の單調に飽ける露西亞人は此の著しき季候の變化を感ずること最も深く、言により筆により其の美を寫して、他の人民の企て及ばざる境に達す。空の色、地の色、雪の光、樹の蔭、川の音、波の響——色にして彼等の目より逸したるものなく、音にして彼等の耳より逸したるものなし。ツルゲニエフ曰く『只だ木の葉の戦ぎのみを以て、余は眼を閉ちて年の節を知り月を知り得べし』と。際涯なき廣野の孤丘、孤屋、孤樹、孤流は季節の轉換、彩色の變化によりて反觀對照の妙を極め、之を見るものをして一毫一釐の細をも逃す能はざらしむ。此の如くにして彼等の美術家は双眼鏡の大なるグラスより眺め小さきグラスより望み、最も廣大なる外郭と最も精密なる彩色とを兼ねるあり。

變化急激なる露西亞特殊の季候は變化自由なる露西亞特殊の氣質を最もよく説明す。嚴酷なる夏と冬の訓練を経たる彼等の機官は、直ちに如何なる氣候にも馴れ得べく、其の感化を受けたる彼等の智力は少しの遲疑なく容易に一の思想より他の思想に轉じ得べし。

露西亞の季候に中庸なくして、極端より極端に轉ずるが如く、露西亞の氣質に中庸なく、常に極端より極端に走る。忽ちにして沈鬱、忽ちにして輕快、忽ちにして溫柔、忽ちにして激怒、忽ちにして服従、忽ちにして反抗、風車の轉ずる如く七面鳥の變ずる如く、或は制し易きこと羊の如くなり、或は觸るべからざること蝟の如くなり、崩るゝ如く笑ひ、死する如く悲み、時に冷情なること水の如く、時に熱情なること火の如く、思想に於て、感情に於て、熱と冷と、静と劇との間の總ての階段を駆け上り駆け下る。重大なることに於て然るが如く、瑣末の事に於て然り。思想家として著作家として然るが如く、唱歌者として舞蹈者として、流行を追ふものとして遊戯を嗜むものとして然り。公の事に於て、私の事に於て、個人として國民として總てのことに於て同一の性行を示す。朝令暮改は露西亞政治の奇觀也。

個人も、社會も、政府も、一時の思ひ付によつて事を盡し事を行ふもの、如く、行かんと欲する時は息のあらん限り疾驅し、止まらんと欲する時は何時までも靜息するもの、如く、慥くべき熱情、活力、自信の時代に次で悲むべき冷情、惰力、自失の時代來り、何事にても

なされば止まざる活動の時代に次で、何事にてもなすを欲せぬ倦怠の時代來る。露西亞人の生涯は撞着を以て充たされ、露西亞國の歴史は矛盾を以て充たさる。同一の人にして同一の境に於て疑惑と信念と、無頓着と熱情と往來交錯し、活ける思想と眠れる行爲と相伴ふを見ること少なからず。されば露西亞は其の最初の傾向によつて俄かに信ぜべからず、最後の結果を見ざれば全く信ぜべからず。最初には疑ひ嫌ひてなすを欲せざりしもの、忽ち驟起し猛力を以て成しとげんとすること往々にして然り。千八百七十七年——八年の東方戦争の如きは著しき實例也。バルカン半島に在る同種同教なる同胞の苦痛を見ること越人か異人の肥瘠を見る如く、如何になり行くも意に介せざるが如く見へし懷疑的社會は只だ日常生活の無聊に飽きたることにより、只だ國內の政治に自由を有せざることにより、纔かに新聞の煽動により、數月にして燃ゆるが如くなり、狂するが如くなり、皇帝及大臣が耳を塞ぎて聞かざりしにも拘はらず、公使及外交官が頭を振りて信ぜざりしにも拘はらず、高きも低きも皆な起ちて回々教征伐の十字軍を起し、遂に國民を擧げて土耳其の戰場に出陣せり。此の如きは、最も炯眼なる西歐の政治家外交家も豫知する能はざりしもの

にして、露西亞國民自身すら覺悟したるものにあらざりき。これ政治的計算より出でたるものにあらざりして寧ろ長く壓抑せられたる人心の火山の破裂也。露西亞人はかく動き易き性質、動かされ易く感じ易き性質、平衡を欠き平度を欠く性質の半を天然及季候の感化より得たること疑ふべくもあらず。既に極端より極端に轉ずる露西亞の季候を知るものは、極端より極端に轉ずる露西亞人の性質に驚かざるべし。

極端より極端に走る性質の一面、即ち變り易く動かされ易きとは、實驗を好み實行を愛する念と相待ちて摸倣、適用の能力を露西亞人に與ふ。下流社會にあつては、單調の生活、懶怠の習慣、古來の習慣、迷信に妨げられて此の性情の著しき發現を見すと雖、上流社會は思想、文學に於て、風儀、慣行に於て、摸倣、適用の能力を逞ふす。露西亞の農夫が如何なる勞働にても愛憎の念なく爲し得べきこと、「ユサツク」が何時にても戦を始め得べく何時にても戦を止め得べきは下流社會に於ける摸倣、適用の能力の曙光として見るべき也。他の點に於て然るが如く、此の點に於て露西亞人は英國人の正反對に立つ。彼等は如何なることも摸倣し得べく如何なるものにも適合し得べき、極めて柔軟にして極めて彈力ある

人民也。

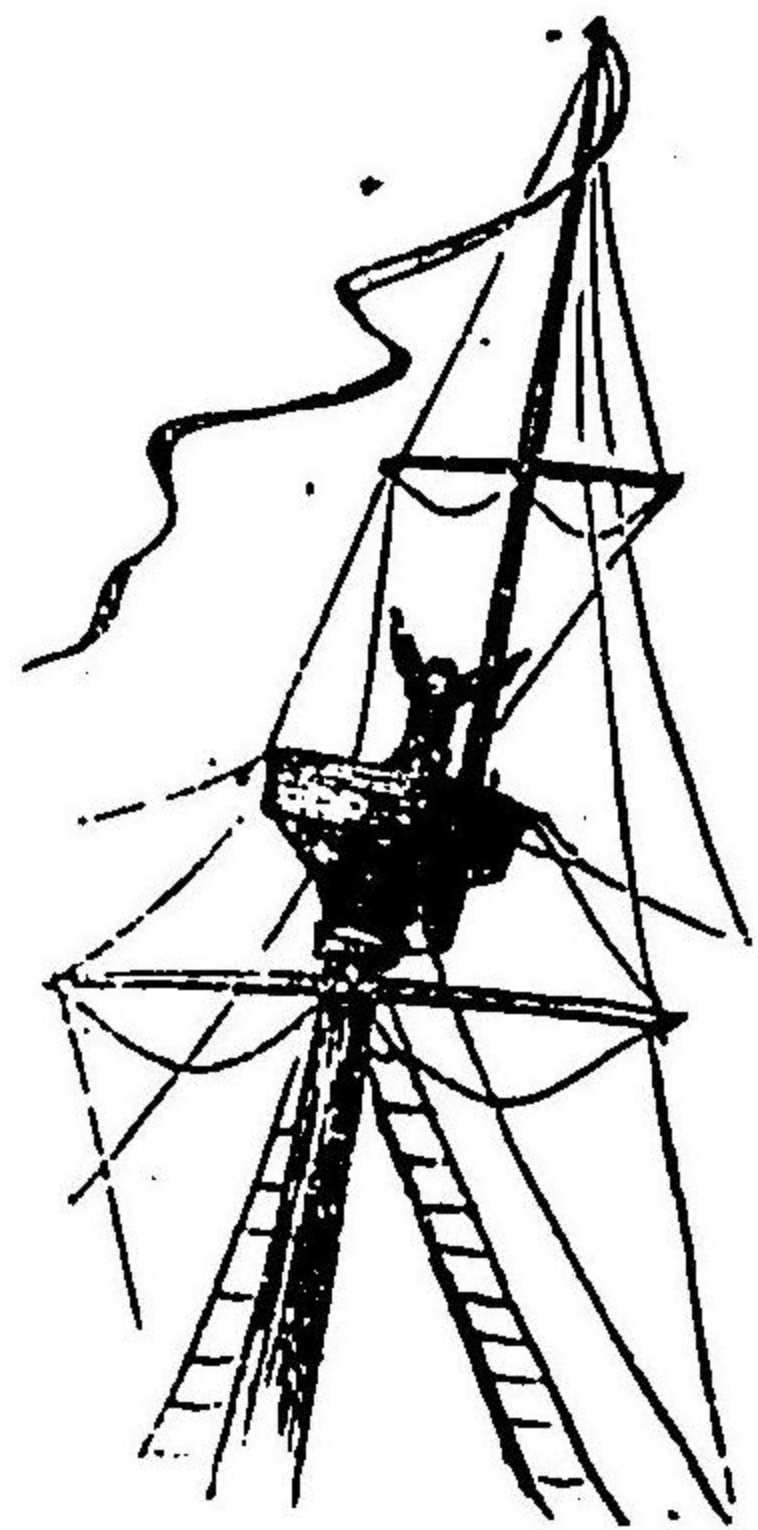
變化自在、臨機應變なることは、其の利害得失を合せて、露西亞人の最も著しき特質也。嚴酷なる天然、極端なる季候はかく彼等の体力を訓練せり、かく彼等の智力を訓練せり。かくて彼等（特に大露西亞人）は東歐の大平原に殖民し、北方にも南方にも同一の成功を以て膨脹せり。かくて彼等は二世紀間長足の進歩を以て、「スラブ」人は歐洲文明以外のものなりと嘲りたる西歐人を驚殺せり。かくて彼等の觀察者は今尙ほ、如何なることか露西亞人に取つて爲し得べきものにして、如何なることか彼等の爲し能はざるものなるを區別するに苦しむ。

若し歴史傳記の中に、此の如き露西亞人の説明を求めんと欲するものあらば、乞ふペートル大帝に行け。半野蠻的なることに於て、極端に走り矛盾多きことに於て、不確實なることに於て、馬鹿らしきことに於て、實用的良識に於て、新を追ふて休まざることに於て、實驗的直覺に於て、障礙を意とせざりしことに於て、心の虚開なることに於て、手の狡猾なることに於て、適合の速かなること、インテレストの廣きことに於て、ペートル

大帝は唯一最高の國民的標本也。國民的缺點はペートルに於て絶頂に達し、國民的長所はペートルに於て天才に達したり。露西亞國民の二極端、今も尙ほ兩極に離れて立てる二つの露西亞人——耐久頑迷なる「ムィツィンク」及び懷疑、變通なる貴族の二人はザインダムの船匠、ペテルブルクの改革者たるペートルの一身に融合せられたり。

かくも多くの異なりたる性質、時としては反對なる性質が一國民に集まりたるを怪しむものあらば、總て此の性質がペートル大帝の一身に集まりたるを見よ。かくも多くの長所、短所は一身に合せられ、國民の間に散布せられたる總ての性情は、一身に集められ、不思議なる怪人、而も最も生氣あり、經綸に富み、活動に適する巨人を作りたり。一たび思ひたることは必ずこれを實行し、一たび實行せば其の極に達し、大も小も重も輕も總てを混同し、西歐を模倣して國民を根底より改革せんとしたるペートルは、實に露西亞人の好標本也、露西亞國民の英雄也、善にも惡にも最大の露西亞人也。露西亞の外此の如き巨大の好標本を誇稱し得べき國民はあらず。而して此の如き巨人に似たる國民の將來の如く有望なるはあらず。彼等は文明人が誇れる高尚、優美の性質に於て缺くるあるが如しと雖、侵

略併呑の時代、武装したる平和の時代に於て優者となり、政治的強大のものとなるべき剛毅不屈の性質を有する也。我等は撞着矛盾なくして露西亞國民の性情を説明する能はず、遂に露西亞國民を形容する能はずと雖、而も其の前途の有望なることを疑ふ能はざる也。



悉比利亞貫通大鐵道

第一、設計の進歩。

悉比利亞鐵道の計畫は一期一夕の急案にあらず、漸を以て其の企圖を廣くし其の經綸を大にせり。其の初めに於ては露西亞本部と悉比利亞西部とを連結せんと欲するに止まりしもの、中頃には悉比利亞諸大河の水利を連結せんとする水運鐵道並用計畫となり、遂に悉比利亞貫通大鐵道の企圖となり、速やかに實行することを期せられたり。

カウント、ムウライヨフ、アムールスキ、千八百五十年黒龍江口を占領し、爾後再三黒龍江遠征の効を擧ぐるや、韃靼海峽のド、カストリ灣とアムール江畔のソフイイスクとを連結する車道を建設せんと欲し果さず、同時に技師英人ダンなるものニヤニ、ノブゴロット

よりカザン及びベルムを経て太平洋岸の一港に達する馬車道建設を發議せしも、政府は耳を傾けざりき。同年米人コリンズなるもの黒龍江鐵道株式會社を創立し、イルクツクとチタの間鐵道を布設する請願を呈出し、稍々精密なる調査の後廢棄せられたり。計畫、建議、請願は屢々呈出せられ、皆な實行すべからざるものなりき。中に就き稍々着實なるものは千八百六十二年「コ、レフ」會社が計畫したるボルガ河オビ河間の線路——ベルムよりニヤニ、タサルを経てチユメンに達するものなりき。

千八百六十四年のウイアトカ飢饉の救濟法を視察せん爲め、千八百六十六年同地方に派遣せられたるコロチル、バグダノウイチが三月廿三日を以て内務大臣に電報したる言に云ふ、「ベルム及びウイアトカ州の救與に關する總ての困難を排し、地方の情態を視察したる後、余の考ふる所によれば、將來ウラル地方に於ける飢饉を防禦する唯一確實の方法は内地よりエカテリンブルクへ、エカテリンブルクよりチユメンへ鐵道を敷設するに在り。此の如き線は、後來悉比利亞を貫き支那境に達するに及び、軍事上及び貿易上最大重要なものとなるべし」と。此の報告は幾何の注意を價したりき。

貿易家リウビモフは千八百六十九年にベルムよりクンクル、エカテリンブルク及びシヤドリンスクを経てクルガンの北四十九露里なるピュルセルスク村までを實測し、西悉比利亞總督ゼラル、クルシヨウは同年露帝に意見書を呈出し悉比利亞連結鐵道速成の必要を論じ、ニヤニ、ノゴロツトよりカザンを経てチユメンに至る線の最近なることを説明せり。

かくの如く多少の根底ある三つの計畫立てられ、多少の注意、議論を喚起し、コロチル、バグダノウイチの指定せるものは北方線路と名づけられ、リウビモフのは中央線路と名づけられ、ゼラル、クルシヨフのは南方線路と名づけられたり。政府部内に於ても、各種の議論、計畫を商量し、約七百露里の線路によりカマ河（ボルガの合流）とトボル河とを連結するはなし得べからざるにあらざるを認め、特別に委員を撰定してウラル地方に派出したり。委員はウラル鑛業の利益を重んじつゝ、悉比利亞貿易の利益を主一の測量目的となすべき意を含められしが、兩者の併立すべからざるを見て、後者を排し前者を擇ひたり。其の後政府は千八百七十二年より七十四年に亘る測量により、(一)キチムヌマ、ウイ

アトカ、ベルム、エカテリンブルク九百三十三露里、(二)ニヤニ、カザン、クラスヌーイ
ムスク、エカテリンブルク一千七百七十二露里、(三)アラテル、ウフア、チエリアピンス
ク一千七百七十三露里の三幹線を劃し、審査委員會は千八百七十五年に於て、ニヤニ、ノフ
ゴロツトよりボルガの岸に沿ひ、カザン、エカテリンブルク及びチニメンに達する線路を
採擇したり。

計畫を立てられ、討議甚だ盛なりしも、畢竟するに總ての議論、總ての計畫、皆な
チニメンに止まり、本部とチニメンとを連絡する内地の線路の撰擇に止まり、チニメンを
過ぎて悉比利亞大原野に考慮を馳するものは極めて稀なりき。而して此の大原野を飛過し
て極東にはムラウイヨフが蒔きたる種子滅せず、千八百七十五年には清鹽斯德よりハンカ
湖に至る鐵道敷設の請願出で、政府も其の必要を是認したりしも、財政に牽制せられて實
行することを得ざりき。

かゝる間に本土に於ける鐵道は漸次延長せられ、千八百七十七年にはオレンブルク鐵道完
成し、翌年にはウラル鐵道開通し、千八百八十年にはアレキサンデル二世の紀念工事たる

べきボルカ大鐵橋竣工し、エカテリンブルク——チニメン間の工事直ちに着手せられた
り。エカテリンブルク——チニメン鐵道はボルガの水運とオビの水運を連結すべく、而し
てオビ——エニセイ運河開鑿せられなば、ボルガの水運はオビ——エニセイ兩河の水運を
連ねてバイカル湖にまで達すべし。此に於てか悉比利亞橫斷交通線の築造は稍近接なる問
題となり、實行を望み得べき問題となり、鐵道を以て水路を連結して鐵道水路を並用する
の計畫出で來れり。

水路兼用悉比利亞大道築造論の先驅者として注意を惹きたるは技師オストロウスキ及びシ
アルステルの計畫なりき。オストロウスキは千八百八十年の始に於て設計を提出し、現時の
状態に於ては、ベルム、トボルスク間鐵道を以てカマ河とイルチシエ河とを繋ぎ、トムス
ク、クラスノヤルスク間鐵道を以てオビ河とエニセイ河とを繋ぎ、オムスク、バルナウル
間鐵道を以てイルチシエとオビとを繋ぎ、かくて水路と鐵道とを併せて支那境に至れば、
廉價なる交通を迅速に築造し得べく、而して後徐ろに全通鐵道の計畫を定むべきことを論
じたり。オビ、エニセイ間運河開鑿の測量に與りたる技師シアルステルは更に大に水運を

利用すべきを論じていふ。オビ、エニセイ間の運河開鑿實行せられ、アンガラ下部の急流改修せられれば、チニメンよりバイカルに至る五千露里の長水路開かるべし。バイカルより湖畔河岸に沿ひてスレテンスクに至れば、以東黒龍江の水路三千露里に連なる。バイカルより、スレテンスクに至るの道程九百五十露里ありと雖、最初の百五十露里はバイカルの湖水とセレンガの河水とを用ふべく、最後の三百五十露里はインゴタ及びシルカの兩流を用ふべし。かくて中間四百五十露里を残すと雖、夥多の小流あり、多少の修鑿を加へて容易に利用すべく、僅かにアノースク湖よりタンシンスクに至るヤプロノウオイ山路に十入露里の鐵道を敷設するのみにしてボルガより太平洋岸に至る悉比利亞貫通の大水路を作るべしと。

爾後設計の提議せらるゝもの愈々多く、土木會社、技師の徒のみならず、パロン、コルプ及びカウント、イグナチーフの悉比利亞二總督共に目下の急務を論じ、イムスク、イルクツク間及びバイカル、スレテンスク間二鐵道の設計案を提出せり。次で浦鹽斯德よりラズトルノエ、ニコルスコエ及びアマチノを経てニス、ポストに至る線路の設計案提出せられた

りき。されど中央悉比利亞に於ける線路は尙ほ容易に實行し得べからざるものとして残りしも、烏蘇里線路を第一に敷設すべきことは此頃よりして容ほ決定せられたりき。

其の方法は容易に決定すべからざるも、悉比利亞を横斷する交通幹線を築造すべきことは既に争ふべからざる必要と認定せられたり。其の太平洋岸よりの起點も浦潮斯德の外に撰ぶべきものなきは既に認定せられたり。されば西方露西亞本土よりの起點決定せられれば、大問題の大體の方向は終に決定せらるべし。此時露西亞本土の鐵道は東方に三つの終點を有したり。北にあるものはチニメンを極東の停車場とし、中央にあるものはミアスクを、南にあるものはオレンブルクを極東の停車場となせり。三點の孰れを擇びて悉比利亞大道の西方起點とすべきかは、千八百九十年の委員會が委托されたる問題なりき。チニメン線は本國線路との連絡容易ならざるが爲めに否定せられ、オレンブルク線は西半に於ける土地の荒涼なるが爲め、東半に於ける工事の困難なるが爲めに否定せられ、千八百九十年末に於てサマラ——ウフア——ズラトウスト——オムスク——トムスク——クラスノヤルスク——ニシニ、チウヂンスク——イルクツクの中央線路可決せられたり。悉比利亞交通

幹線の大體は此に於てか定まれり。

大體の方向の決定は大體の方法を豫定せり。これより先き數年來最も廉價簡便なる設計として最も勢力あり、容ほ決定せられたるは水路連絡鐵道なりき。

カザン、ヘルム間……水路五百九十七哩。

ヘルム、チユメン間……現在のウラル鐵道五百十二哩。

チユメン、トムスク間……ツーラ、トボル、イルチシユ及びオビ諸水路千八百五十六哩。

トムスク、イルクツク間……新設鐵道千三十四哩。

イルクツク、ムイソフスキー埠頭間……バイカル航路百哩。

ムイソフスキー、ストレンテンスク間……新設鐵道六百六十九哩。

ストレンテンスク、グラフスキー間……黒龍江及び烏蘇里水路千五百二十五哩。

グラフスキー、浦潮斯德間……新設鐵道二百五十五哩。

此の設計によればカザンより浦潮斯德に至る全長六千五百四十八哩、其中水路四千七百八哩、鐵道二千四百七十哩也。而して烏拉爾鐵道五百十二哩は既に開設せられたれば、千九百五十八哩の鐵道を新設するのみにして悉比利亞を横斷する大交通線を築造すべく、其の要する費用も鐵道に關するもの約千六百二十五萬磅、水路に關するもの約七百三十五萬磅、合計約二千三百五十萬磅に過ぎざりき。

廉價なる設計は大なる不便を伴ひ來れり。水陸並用の設計を實行せば、約二千三百五十萬磅の廉價を以て悉比利亞を横斷する大交通線を作るべしと雖、モスコウより浦潮斯德まで貨物を運送するに七十五日を要し、旅客を搬送するに三十七日を要し、且つ水路は長き間水結し、充分に用ひ得べきは一年間僅かに四ヶ月半に過ぎず。既に大體の方向を決定し、商業上、軍事上、悉比利亞鐵道の愈々必要の急務なることを認定したる露西亞は如何に廉價なるも此の如き不利を忍ぶ能はざるに至り、千八百九十年末委員會の決議を採用して、チユメンを西方の起點とすることを否定し、此間の線はボルガの水路のみによらざることを示したる後、速やかに水陸並用の設計を否決し、悉比利亞貫通大鐵道を敷設するに決したり。千八百九十一年三月廿九日露帝が皇太子に與へたる敕諭に曰く――

「朕頃日悉比利亞全國を貫通する鐵道布設の詔勅を發し、天運富饒なる此國を露國內地の線路に連絡せしむ。因て汝に命ず、汝東洋諸國の漫遊を終りて後、悉比利亞に至らば、朕が此の意を諸有司に告げ、兼ねて悉比利亞大線路中烏蘇里線區の第一軌線を浦潮斯德に布設するに臨望せよ。此の線路は國庫の財を以て布設し、其の監督も亦官の任するものにして、眞に國家的事業とす。汝が此の事業の開始に參與するは朕が悉比利亞と他の領内との交通を便にし悉比利亞國の平和的發達を圖る希望の切なるを世に表明する所以也。

五月十二日皇太子は浦潮斯德に於て此の敕諭を宣揚し、悉比利亞鐵道定礎式の盛典を擧げ

たりき。

決定は直ちに着手すべきことを命ぜられ、全線路七區に分かれたれ、左の概算書を決定せられたり。

延	チエリ ペンスク、 オビ間	オビ、イ ルクック	イルクツ ク、ミツ ウスク間	ミツウ ク、ス ンスク	スレテ ンスク、 ハム ロフカ間	ハマ ロフ カグラ フスク 間	クラ フス ク、ウ ラ ク、 オ ス ト ク 間	合 計
土地買収	1,234,567	2,345,678	3,456,789	4,567,890	5,678,901	6,789,012	7,890,123	34,567,890
地下工事	1,234,567	2,345,678	3,456,789	4,567,890	5,678,901	6,789,012	7,890,123	34,567,890
地上工事	1,234,567	2,345,678	3,456,789	4,567,890	5,678,901	6,789,012	7,890,123	34,567,890
線路附屬	1,234,567	2,345,678	3,456,789	4,567,890	5,678,901	6,789,012	7,890,123	34,567,890
電線	1,234,567	2,345,678	3,456,789	4,567,890	5,678,901	6,789,012	7,890,123	34,567,890
線路建築物	1,234,567	2,345,678	3,456,789	4,567,890	5,678,901	6,789,012	7,890,123	34,567,890
停車場建築物	1,234,567	2,345,678	3,456,789	4,567,890	5,678,901	6,789,012	7,890,123	34,567,890
給水	1,234,567	2,345,678	3,456,789	4,567,890	5,678,901	6,789,012	7,890,123	34,567,890
停車場附屬品	1,234,567	2,345,678	3,456,789	4,567,890	5,678,901	6,789,012	7,890,123	34,567,890
經理費及臨時費	1,234,567	2,345,678	3,456,789	4,567,890	5,678,901	6,789,012	7,890,123	34,567,890
合計	1,234,567	2,345,678	3,456,789	4,567,890	5,678,901	6,789,012	7,890,123	34,567,890

軌條及材	1,234,567	2,345,678	3,456,789	4,567,890	5,678,901	6,789,012	7,890,123	8,901,234
車輛及貨	1,234,567	2,345,678	3,456,789	4,567,890	5,678,901	6,789,012	7,890,123	8,901,234
材料運送費	1,234,567	2,345,678	3,456,789	4,567,890	5,678,901	6,789,012	7,890,123	8,901,234
合計	1,234,567	2,345,678	3,456,789	4,567,890	5,678,901	6,789,012	7,890,123	8,901,234

全線の經費三億五千萬ルーブルを要し、而して別に少なからざる補助工事を要すと概算せられたり。

又架橋費に二百四十萬支出の場合には二千萬留以内を支出するものとす

第四項 曩に軍費補充の目的を以て發行せし臨時公債償却のため千八百八十一年一月一日附勅令に基き國庫より帝國銀行に拂込みたる金額内より特に九千二百七十三萬四千五百九十一留の金額を悉比利亞鐵道布設費及之に附帶する諸事業費に豫定し大藏大臣をして千八百九十三年より千九百年に至るの間に於て同工事要求の程度に應じ毎年四千萬留を超過せざる金額を支出せしむ

第五項 前項九千二百七十三萬四千五百九十一留の外第一區の工事費を補ふため大藏大臣をして經常及臨時歳入金中より支出するか若くは公債募集の方法に依り更に五千七百二十六萬五千四百九留までの金額を調達するの考案を立て定規に依り勅裁を仰かしむべし尤も本額の徴收は千八百九十三年より千九百年まで即ち最近八年間に支出し得らるゝの法に由るべし而して如何なる場合あるも右金額調達の都合よりして鐵道工事に淹滞を來たすことなからしむるを要す

第六項 悉比利亞鐵道會議を稱する一局を特設し議長は勅撰とし委員は内務大臣、官有地事務大臣、大藏大臣、逓信大臣、會計検査院長より組織し左記の諸事項を商議査定せしむ

(一) 第三項中に指示したる費額の範圍内に於て悉比利亞鐵道布設に隨伴する諸事業費に充てたる金額の使用を定めて直に勅裁を請ふものとす

(二) 悉比利亞鐵道に附帶する補助事業の決行に關する諸問題並に布設工事に附きて諸大臣より提出すべき諸問題を査定すべし而して參事院及大臣會議の所管に屬する事に係る本局の決議案は條件の種類如何に依り或は參事院或は大臣會議を経て勅裁を仰ぐものとす其他の事項に至りては直に勅裁を仰ぎ若くは追て制定さるべき本會議の事務規程に基き直に之を執行すべし

(備考、本文の議案勅裁を経たる後同年十二月十八日海陸軍兩大臣を第六項に記載せる悉比利亞鐵道會議委員中に加へ其會議に參與せしむる旨勅令ありたり)

鐵道敷設法確定せられ、敷設法中に規定せる鐵道會議設定せられ、皇太子ニコラス其の議長に任せられたり。

卿は長途の航海を終へ、露國の境土に達するや、朕の命を奉り、千八百九十一年五月十日浦湖斯德に於て、朕が企畫せる悉比利亞鐵道の起工式を執行せり。

今や卿を悉比利亞鐵道會議の議長に任じ、卿に委するに東方露西亞の安寧と開明に大關係ある本事業を完成するの任を以てす。

上帝卿を扶けて、朕の最も熱望する起業、及之と共に悉比利亞に於ける殖民及工業の發達を幫助すべき豫計を實行せしめ給はんことを希望し、朕は卿が朕及貴重なる露國の繁榮を満足せしめんことを信す。

千八百九十三年一月十四日

聖彼得堡に於て

アレキサンドル手記

皇太子ニコライ、アレキサンドロウ非チ大公殿下

敷設法確定、鐵道會議設定、皇太子ニコラスが議長に任せられたると、内閣議長ブングが副議長に任せられたること、諸大臣が議員に任せられたことは、大事業將來の進歩を確證するものなりと信ぜられたりき。悉比利亞貫通鐵道の大事業は、實にこれよりして、着々其の歩を進めたり。

以下、順を追ふて此の會議の議決を列擧せしめよ。或は少しく繁に過ぐるの嫌なきにあらす。雖、其の如何に實行されつゝあるかを尋ねれば後の大事業を企てんとするものゝ爲めには大なる教訓たるべく、此の如き大事業を實施する露西亞の力量の如何に大なるかを審かにせば、相駢び相隣りて國を立つるものゝ爲めに最も大なる警戒たらずんばあらず。

第一回會議(千八百九十三年二月廿一日)。

開會の初に於て議長皇太子議員に告げて曰く――

悉比亞鐵道會議の第一回を開くに方り、予輩の前途に横る問題の重大なるを想ひ、予は衷心憤怖に耐へず。然れども愛國の至情と國益振興の熱望とは、予をして竟に予が最愛なる父帝の勅命を拜受せしめたり。予は信ず、是等の感情は齊しく廻響を激動するを。是れ予輩が協心同力以て此重任を全くすべきを信じて疑はざる所以なり。

同會規則案の審議を了り大藏大臣提出案を左の如く議決せり

- 第一 臨時官有地事務大臣をして、鐵道線路に當る地質調査の速成を計るため、人員及經費の増加に關し、成るべく急速に其意見書を作り、之を悉比亞鐵道會議に提出せしむる事。
- 第二 工部大臣、大藏大臣、臨時官有地 務大臣及會計検査院長をして、互に商議を遂げ、悉比亞鐵道通過の區域内に於て、鐵道の敷設、營業及修繕に必要な工業、即ち鑄鐵廠、製鋼業、「セメント」製造業並に鑛山業、殊に石炭及鐵礦の採掘に關する問題を審査せしむる事。
- 第三 工部大臣をして、内務大臣及大藏大臣と協議の上、鐵道敷設材料を運送すべき悉比亞河水航路の調査を爲し、其航路の状況を改良し、且つ貝加爾湖に由り悉比亞鐵道の運輸貨物を間斷なく轉送するに差支なきを期する等の諸問題に附き審査を遂げしむる事。

第二回會議(千八百九十三年二月廿八日)。

大臣會議及參事院財務部との聯合會議開かれ、イルクツツク總督も參列し、工部大臣より提出したる中央悉比亞線路の方位撰定案を議し、技術上最も利便なるものとして左の議決をなせり。

- 第一 中央悉比亞線路はオレ河畔クリウオシチエーコフよりアチンスク、クラスノヤールスク、カンスク、ニジニ、チウサンスク及イルクツツクに至るの本線と、マリンスクを経てアチンスクよりトムベクに至る支線とを決定し、且つ工部大臣は必要と認むる場合に於て、以上列記の諸市府を通過する一般線路の方位を變更せざる限は、敷設費削減のため、小部分の線路方位を變し得る事。
- 第二 本年中に於てオビ河よりイルクツツクに至る線路の起工を執行する事。
- 第三 イルティシユ、オビ及エニセイ三河に橋梁の架設を執行する事。但し該橋梁架設のため本鐵道築造工事をして遅滞せしめざる事。
- 第四 以上諸項に列擧せる工事は國庫の直接支配に屬せしめ、官設鐵道會計検査のため制定せられたる一般の順序に據り會計検査院長に監督せしむる事。

第三回會議(千八百九十三年三月八日)。

北洋よりエニセイ河口を経て敷設用材を運送せん爲め航路検測に關する海軍大臣の提出案を審議し、エニセイ灣及エニセイ流域を検測せしむるの必要を認め、左の如く議決せり。

第一 本年中に於て、エニセイ河口の検測隊を派遣するため、同河の航行に適する汽船二艘を外國に注文することを海軍大臣に委ね、同船の乗組員は總て露國人を採用する事。

第二 前項の汽船購求費並に検測隊派遣の費額は三十萬留とし、昨年十二月十日勅裁を経たる悉比亞鐵道敷設上附帯の企業費の内より支辨せしむる事。

第三 前記の検測隊と同時に、エニセイ河口を経てクラスノヤルスクまで、鐵軌其他の鐵道附屬品若干を運送するため、工部大臣と商議の上、外國の汽船傭入方を海軍大臣に委ね、此費用は悉比亞鐵道工事主管廳の經費を以て支辨せしむる事。

第四回會議(千八百九十三年三月廿二日)。

海軍大臣は前回會議に於て議決し勅裁を得たる事項を遂行したることを報告し、別に検測涼船の爲めに石炭貯藏船を造るの議を助かし多數の同意を得たり。

第五回會議(千八百九十三年三月廿七日)。

參事院財務部との聯合會を開き、工部大臣は後貝加爾線路検測費支出案を提出し、同線路の再検測を完了し、且つストレンスク及ポクロフスク間の線路を検測せしむるの必要に付き意見を詳述せり。黒龍沿岸地方總督及イルクツツク總督も列席し、検測費三十萬留の支出を議決せり。

第六回會議(千八百九十三年六月七日)。

此の會も亦た參事院財務部との聯合會にして、工部大臣の提出に係る西部悉比亞線の第一區及第二區並に中央悉比亞線第一區の敷設費支出案に就き左の議決をなせり。

第一 西部悉比亞線の第一區及第二區並に中央悉比亞線第一區の敷設費として、鐵軌取付品及車輛等の代價を併せて七千三百三十六萬五千八百五十留の支出を確定し、甲區に屬する豫定費額を節減して、乙區の豫定費額に充用するの權を工部大臣に委ねる事。

第二 前項に定めたる費額の外、別に補充費として三百七十五萬七千留を備置き、必要の都度、工部大臣、大藏大臣、及會計検査院長商議の上之の支出を執行する事。

第三 西部悉比亞線及中央悉比亞線の敷設上、第一項に定めたる費額内に於て實際の便利を進め、又は工費を節減するため、既定の股附を變更するを必要と認むる場合に於ては、工部大臣をして之を執行せしむる事。

次で左の議案をも可決したり。

第一 本年中左記の線路を検測せしむる事。

(甲) 烏拉爾鐵道とズラトウスト、チエリアピンスク鐵道とを連絡するための三方面線路、即ちミアスク、エカテリンブルク間、チエリアピンスク、エカテリンブルク間、チエリアピンスク、オストロフスカヤ間の検測。

(乙) クラフスカヤ、ハバローフカ間の最終検測。

第二 甲の検測費は六萬留、乙は六萬七千留として、其の支給を工部大臣に委ね、別に乙の検測員として陸軍部内より派遣せらるべき者の手當五千留の支給を黒龍沿岸總督に委ねる事。

第三 前上の費額は、工部省本年度の臨時費二千六百萬留の内より支辨する事。

第四 若し第一項に示す三方面の外オストロフスカヤと悉比亞線の或る一箇所との間に連絡を通すべき線路の検測を爲すを得べき場合には、其費額は甲の検測費に充てたる六萬留の額を以て支辨せしむる事。

第七回會議(千八百九十三年六月十四日)。

大藏大臣より提出せし黒龍州の紀事編纂費支出案を討議し、悉比亞鐵道附帶企業基金額の内より三千留を支出することに議決したり。其の理由の概略に曰く、黒龍州に於ける富饒の天産物は無盡藏なり。而して其の人口は一萬四千の滿州人を併算して九萬人許に過ぎず。露國人の重なる居住部落は、黒龍江沿岸哥索克兵村の近傍と、耕作に適宜なるゼーヤ、フレイヤ二河間の平地とに在るのみにして、黒龍江に沿ひ小興安嶺よりハバロフカに達する中間の沃地は、今尙ほ甚だ僅少の人口を有するのみ。若し此の地方に人口の充實するならば獨り農業のみならず、採金業其他鐵鑛、炭坑、銅坑、銀錫混合坑、石腦油坑等の諸業及び伐木業の如き、皆大産業にあらざるなし。されば悉比亞鐵道の敷設と同時に黒龍州の人口を増殖すべき方法を施設せざるべからず、人口の増殖を謀る最要務として黒龍州紀事を編纂せざるべからず。

第八回會議(千八百九十三年六月廿六日)。

内務大臣の提出に係る悉比亞線路オムスク憲兵署設置案を決定したり。

第一 目今軌道敷設中のチエリアピンスク及クラリスノヤールスク間の工事区内に於て憲兵警察を施行するため、臨時悉比亞線路オムスク憲兵署を設置する事。

第四 露曆本年七月一日(八月十三日)より十二月三十一日まで、憲兵署の經費額は三萬三千四百五十七留五十哥と定め、内一萬七千七百四十五留五十哥は工部省本年度の臨時費豫算額内より支辨し、一萬五千七百七十二留は陸軍省本年度の經費定額内より支辨する事。

第五 該憲兵署に屬する明年以後の經費額は、陸軍大臣に於て毎年陸軍省の豫算費目中に記入する事。

第九回會議(千八百九十三年十月卅一日)。

内務大臣より提出せし悉比亞鐵道幹線と、トムスクとを連絡する支線敷設に關するトムスク市會の請願書を審査し左の如く決定せり。

第一 工部大臣に委ねるに、一定の手續に依り悉比亞鐵道幹線よりトムスクに達する支線を敷設するため、關係者との間に商議を開くことを以てし、支線の竣工期限は中央悉比亞鐵道のイルクツツクまで敷設を了る期限より後れざる事。

次に内務大臣より提出せし烏蘇里鐵道工事に關する決議は

第一 一定の手續に依り關係者と商議を盡し、明年の春季よりクラフスカヤ、ハメローフカ間の線路工事に著手す

る事。

第二 前項の起工に差支なきを期するため、諸般の準備上本年冬季中に於て、爲すべき作業の方法を一定し、大藏大臣と協議を経て、必要の金額を地方長官の管掌に委託すべき事。

此の會議は鐵道敷設の附帶事業として日、清、露貿易の擴張に關する方法を討議決定せることによりて注意を惹起せり。大藏大臣は東京駐劄特命全權公使の通牒——近來日本人は大に悉比利亞鐵道の進歩に注目し、鐵道敷設より來る露領遼東地方の發達は日本の輸出貿易に一大影響を及ぼすべしとなすとの通牒を報告し、其の意見を陳述して云ふ、今日の急務は、遼東に於ける露國貿易の情態及び其市場の需要を研究するにあり。此目的を達せんには、我外交官及領事をして諸國の商況及工業の發達に關する緊要精細なる材料を定時報告せしむるにあり。又清國との陸上貿易及日本との海上貿易を取調ぶるため、大藏、外務、兩省協議の上、其地方に於て遼東の事情に通曉せる人々を以て特別委員會を組織し、黑龍及イルクツク兩總督をして直接之に参加せしむること最も良策たるべしと。會議はまた日清兩國との貿易を振興するには、獨り政府及商業社會をして其商況を知悉せしむるの必要あるのみならず、兩隣國の内政に屬する種々の問題の決定を促すことも肝要なれば、

露國商のために更に幾多の港灣を開かしめ、貿易を自由にするを望む意を示せり。議長皇太子は、現今清國に於ては天津よりの鐵道築造に著手し毎年二百萬弗を支出すと云へば、將來其國內に著しく鐵道線路の延長を見るべきのみならず、遂に其鐵道をして悉比利亞鐵道と連絡せしむるに至るべく、土壤連接數千里に渉る兩大隣國間の貿易交通に大利便を與ふべきことを述べたり。かくて鐵道會議は日清兩國との貿易擴張に關する提議は豫じめ討究考査を要すべきものと認定し、大藏大臣をして諸官衙と協議を遂げて審査したる悉比利亞鐵道敷設及附帶其事業に關する考案を本會議に提出せしむることに議決せり。

第十回會議(千八百九十三年十一月二十二日)。

工部大臣より提出せし悉比利亞鐵道敷設費に充てたる既定支出額五千六十四萬留の支拂に關する報告書を調査し、次に同大臣が提出せる悉比利亞鐵道工事現況報告書を朗讀せしめ、工事の進度著しきことを認定せり。報告書は十月十三日に於ける工事現況を叙述したるものにして其の大要左の如し。

西部悉比利亞線路の第一區に屬する工事は、千八百九十二年より著手し、既に築成せる土積八十九萬四千三百立方

「サーゼン」(「サーゼン」は凡そ七尺)に達し、内四十四萬四千三百立方「サーゼン」は本年六月一日より十月十三日まで築成し、豫定の總築土積の八割に上れり。停車場建設地の築土積は豫定の總土積の四割五分に達せり。其他架設を終りたる橋梁は二十五箇所、敷設せる線路の延長二百四十一「ウエルスト」にして、ガムスクまで電線の架設を終りたり。

其の第二區は六月一日より起工し、既に築成せし土積十萬七千三百立方「サーゼン」にして、停車場其他の建物三棟を築了し、敷設材料品の準備中。

オビよりクラースノヤルスクに至る中央悉比利亞線路の第一區は本年より起工し、夏季中築成の土積十一萬九千立方「サーゼン」にして、二萬本の枕木を製了し、鐵軌二十一萬「ブード」を現場に運搬せり。最終の検測を終りたる線路の延長三百「ウエルスト」に達し検測中の線路は三百「ウエルスト」なり。

烏蘇里線路の敷設を終りたる延長は三百七十七「ウエルスト」、電線架設の延長は複線百四十一「ウエルスト」、單線二百三十二「ウエルスト」なり。土工は豫定の總築土積の八割六分に上れり。石工其他建物の築造工事は全く終り、現場に運搬せし列車二十二輛、無蓋車其他貨車の輛數三百六十八の多きに上れり。

此の報告書に基き工部大臣はイルクツツクとバイカル湖岸のリストウ井ニーチノエとの間に一時假鐵道を敷設し、湖上を往復する漁船を備へ、以て中央悉比利亞線路と後バイカル線路との連絡を速成せんとする方案を提出し、會議は之を可決すると共に、一時假に中央悉比利亞線路と後バイカル線路との間に連絡を通ずるがために悉比利亞大鐵道の全通を遅延せしむるが如き結果なきを期せざるべからずとの議を確定せり。又イルクツツクまでの

敷設を千八百九十八年中に完成し、豫定の竣工期限を二箇年短縮することにつき、當事者クリウオーセインの説明する所に曰く、オビ河よりイルクツツクまでの敷設年限を千九百年と豫定したる所以は、敷設材料品等を現場に運搬するに其發達の起點をオビ河畔の一箇所に限定したるを以てなり。然るにチユル井ム及アンガンの二河流もオビ河の如く、敷設材料品を船舶に搭載して運送するの便利あることを、實地に就きて探檢するを得たり。即ち右の二河流を利用すればアチンスク、クラースノヤルスク及イルクツツク地方に亘る線路の敷設は殆ど同時に着手するを得べし、從て竣工の期限を短縮するを得べしと。かくて會議は左の議決をなせり。

工部大臣に左記の事項を委ぬる事。

- 一 中央悉比利亞線路の落成期限を短縮するため要する費額の計算、イルクツツク、リストウ井ニーチノエ間の線路検測並にバイカル湖航路の測定。
- 二 バイカル湖畔鐵道線の最終検測。

最後に工部大臣は、十一月十四日以降浦潮斯徳とニコリスコエの間百一露里の線路に於て、客車及貨車の運轉を開始したる旨を報告するや、議長皇太子は悉比利亞鐵道工事の

進度著しく、頗る満足するに堪へたりと述べたり。

第十一回會議(千八百九十三年十二月十三日)。

左の事項を審査せり。

- 第一 工部大臣の提出に係る、千八百九十四年度に於ける悉比利亞鐵道工費支出額見積書。
- 第二 悉比利亞鐵道會議附屬準備委員の調製に係る、千八百九十四年度に於て同鐵道の附帶企業基金額の内より支出すべき費額豫算書。
- 第三 内務大臣の提出に係る、中央統計委員の調製せし悉比利亞地圖の刊行費見積書。
- 第四 會計検査院長の提出に係る、悉比利亞鐵道附帶企業基金額の内より支出せし費額の検査上に要する費用見積書。
- 第五 工部大臣の提出に係る、貝加爾湖航路の測定費見積書。

第三項に付きては、凡そ八千留を悉比利亞鐵道附帶企業基金額の内より支出することに決定し、第四項は三千留を、第五項の貝加爾湖航路測定費は五千留を支出することに決定したり。

第十二回會議(千八百九十四年一月三日)。

工部大臣及大藏大臣の商議を経て、西部悉比利亞鐵道の第一區チエリヤーピンスクよりク

イルガンに至る既設線路二百四十露里を地方人民の用に供するため貨物運輸規則を假定し、昨年十二月十五日より開業せりとの報告に對し、議員は、嚮に浦潮斯德及ニコリスク間の線路に於て乗客及貨物の運送を創始するに至りたると共に、悉比利亞鐵道工事の進度著大なるを示すと認容せり。工部大臣はまたチエリヤーピンスク、クイルガン間の貨物運賃額は日々千留に上り、浦潮斯德、ニコリスク間の線路に於ける日々の収入額は平均六百留に上る旨を報道せり。

官有地事務大臣は、悉比利亞鐵道線路近傍の地質探検隊に對し、本年度に於て支給すべき費額支出案を提出し、悉比利亞鐵道附帶企業基金額の内より十萬四千九百四十八留十二哥を支出する決定を得たり。

次て工部大臣は特に書面を提出し、後貝加爾線路の敷設は歐羅巴、露西亞よりイルク、ツクに達する線路の落成を竣すして、千八百九十五年には必ず敷設工事に著手せざるべからず。依て今より材料品の準備を圖ること緊要なり。就中「セメント」を以て最要品とす。「セメント」は後貝加爾地方に於て製造するを得べく、又は歐羅巴、露西亞より輸送するも可なれ

とも、歐羅巴、露西亞より輸送するに於ては、道路の遼遠なるにより、非常の高價を拂はざるべからず。故に後貝加爾地方に「セメント」製造所を設立するは、線路敷設上に利あるのみならず、將來無量の利便を感すべし。然れども製造所を設立するには、從來シルカ、ヒルカ、セレンガ等の河畔に於て發見せる石灰其他「セメント」製造原料品の産出坑を精密に探検せざるべからずと論じたり。此議論は探検隊派遣費として悉比亞鐵道附帯企業基金額の内より八千留を支出するの決議を得たり。

第十三回會議（千八百九十四年二月……）。

工部大臣は報道して曰く、烏蘇里鐵道のチウエリスカーヤとチエルゴニフカとの間八十三露里の線路は本年二月一日より開業せり。新開業線路の延長八十三露里、舊開業線路の延長百一露里を合算すれば、百八十四露里に達し、舊開業線路に於て本年の一月までに搭送せし私民の貨物量は合計十三萬七千五百五十「アード」、運賃の收額は三萬九千九百九十四留に達せり。

會議の要點は烏蘇里鐵道のグラフスカーヤよりハパロフスクに達する線路の起工に關す

る提議なりき。去る千八百九十一年中北部烏蘇里線路の豫測を爲したる技師の意見によれば、グラフスカーヤよりハパロフスクに達する線路は十露里許を除くの外、總て烏蘇里河岸に沿ひ敷設せんとすの設計なりき。然るに昨年の秋再検測を遂げ、グラフスカーヤの北百露里の處よりクードロウアーヤまで九十五「ウエルスト」間は、烏蘇里河より十五露里を隔て、夫より以北ハパロフスクまでの間は、尙ほ遠く河を隔て敷設するを得べき新線路を測定せり。此方位を採定せば線路を短縮し、工費の如きは最初の豫算額より百萬留許を省くべしと。會議は工費を節減し、線路を國境より遠く離隔するに附きては同意を表するも、線路の變更に由り、起工の手順を遅延するを欲せずとし、審議の上左の如く議定せり。

第一 北部烏蘇里鐵道即ちグラフスカーヤよりハパロフスクに達する線路の方位は、工部大臣に於て黒龍江沿道總督との商議上、工費の省略及國境の遠隔を要するため利ありと認むる場合に限り、多少變更するを得せしむる事。

第二 北部烏蘇里線路の敷設工事は本年申著手せしむる事。

第三 前項の工費は一切國庫より支辨する事。

第四 工費は最初の豫算額より多額に上らしめざる様計算を立つる事。

第五 工部省本年度の臨時歳出額の内より北部烏蘇里線路の起工費及車輪費として、五百四十八萬六千留を支出する事。

第十四回會議（千八百九十四年二月）。

工部大臣の提出に係るチユルサム河及アンガラ河航路改修費支出案を討議したり。二河の航路をして、鐵道敷設材料品を自由に運送するに差支なからしむるに至らば、中央悉比利亞線路の敷設は豫定の期限より二年間早からしむるを得べく、後貝加爾線路の敷設も亦速に著手することを得べきなり。會議は此の利を認めて左の如く議決せり。

第一 チユルサム河及アンガラ河に由り、悉比利亞鐵道の敷設材料品を現場に運送するため、二河の航路改修工事に著手せしむる事。

第二 改修費豫算額百萬留の内、差向き五十萬留を、工部省本年度臨時歳出額の内より支出し、此費額は西部及中央悉比利亞線路の敷設費豫算額の内より節減するを得べき額を以て補填する事。

第三 改修費豫定額の内必要に由り、甲乙費額の流用を要する場合に於て、之を執行するの權を工部大臣に委ねる事。

第四 改修工事は悉比利亞鐵道建築局の管理に屬し、該工費等の支拂計算は所定の規程に據り、會計検査院の監督に付する事。

工部大臣はまた、クラリスノヤルスク及イルクツク間の線路敷設起工費並に貝加爾湖畔鐵道及イルクツクより貝加爾湖西岸のリストウ井ニイチナイヤに達する支線路の検測費

支出案を提出し、皇太子は貝加爾湖畔及イルクツクより湖の西岸に達する支線路検測案を提出し、左の議決を得たり。

第一 貝加爾湖畔線路の検測に關する準備、並にイルクツクより湖の西岸リストウ井ニイチナイヤに達する支線路の検測は本年中に著手せしむる事。

第二 貝加爾湖畔線路検測の準備費として一萬留、イルクツクよりリストウ井ニイチナイヤに達する支線路検測費として五千留、クラリスノヤルスク及イルクツク間の線路敷設起工費として二百九十八萬五千留、合計三百萬留を工部省本年度の臨時費額の内より支出する事。

太平洋艦隊司令長官海軍中將チルトーフの上申書、此の會議に提出せられたり。其の要にいふ、浦潮斯德港と日本とは相距ること遠からず、同港より日本島の東北隅青森に至る間の距離は四百二十哩の航路を隔つるのみ。青森は將來日本の一大商港たるべく、東京との間には既に鐵道の通ずるありて、行程二十六七時間也。悉比利亞鐵道落成の後、露西亞より日本を経て亞米利加に達する航路の要港に適することは復た言を俟たざるなり。青森の外、東京と鐵道の聯絡を通ずる敦賀及直江津あり、其行程凡そ十二時間乃至十七時間に過ぎず。海軍大臣は此の上申書を提出して浦潮斯德と日本の一港との間に汽船航業を創

起するため調査書を蒐集するの必要を説き、左の議決を得たり。

上中書を大蔵大臣に廻付し、上中書に示す問題に關し蒐集せる調査書類と共に査定せしむる事。

第十五回會議(千八百九十四年……)。

第十六回會議(千八百九十四年……)。

中央悉比亞線路敷設につき、徒刑囚及流罪民使役に關する内務大臣の提出案を議定したり。此の時の計算によれば、中央悉比亞線路の敷設工事に罪囚及流罪民を使役するに於て、實際得べき人数はイルクツツク及エニセイスク二縣の監獄に於ける囚徒千百人、悉比亞地方の流罪民凡そ一萬二千人。

第十七回會議(千八百九十四年五月十五日)。

嚮に勅令を以て定められたる所に據れば、第一次西部悉比亞線路、中央悉比亞線路、浦潮斯德よりクラフスカイヤに達する南烏蘇里線路、及烏拉爾鐵道と悉比亞鐵道との接續線路を千九百年までに竣工し、第二次及第三次の着手期限、及竣工期間等は追て確定する見込なりき。然るに昨年の秋に於て、歐羅巴、露西亞よりイルクツツクまでの鐵道は千八

百九十八年を期し全通するを得べきことを認定し、クラフスカイヤよりハペロフスクまでの線路は本年より敷設に着手することに決定し、全烏蘇里鐵道は千八百九十六年に於て敷設を完了すべき充分の見込を有するに至りしかば、議長皇太子の發議により全通を速ならしむべき方法を議し、後貝加爾線路及黑龍線路の檢測、起工等の期限に關し左の如く決定せり。

第一 千八百九十八年を期して後貝加爾線路の敷設を了り、其開業に差支なからしめ、其他同時に中央悉比亞線路をイルクツツクまで敷設し、且つ同所より貝加爾湖畔のリストウイニニノイまで支線路の敷設を完了するため、夫々工事に着手せしむる事。

第二 黑龍線路の竣工期限は千九百一年より遅延せしめざる様、工事の準備に着手せしむる事。

次に工部大臣の提出に係る後貝加爾線路及黑龍線路の檢測費支出案、後貝加爾線路の若干部分に於ける起工準備に關する方案を審査し、左の如く議決せり。

第一 後貝加爾線路の起工準備は工部大臣の指揮に委れ、本年より施行せしめ、凡そ線路百露里の敷設用に供する鐵軌、竝に汽車六十餘輛を同地へ發送する事。

第二 後貝加爾線路及黑龍線路の檢測を實行する事。

第三 黑龍線路の檢測費として百萬留、後貝加爾線路の檢測費として二十五萬留を支出する事。

海軍大臣の提議により決定したるは、

- 第一 エニセイ、オビの兩河口、竝にカラ海一部の検測を遂げしむるため、検測隊派遣の件を海軍大臣に委ねる事。
- 第二 検測隊として派遣すべき人員には、所定の規則に基き増俸及特別手當を給與する事。
- 第三 検測隊派遣費は、本年分五萬二千三百五十三留、明年分五萬五千六百五十七留、合計十萬八千十留とし、悉比利亞鐵道附帶企業基金の内より支出する事。

第十八回會議(千八百九十四年六月十二日)。

工部大臣の提出に係る、悉比利亞鐵道用の車輛、其他所屬具調製費支出案に對する決議左の如し。

- 第一 西部悉比利亞線路の第一區に備ふる車輛等の調製費豫定額四百八十三萬六千二百三十八留、第二區の分同三百七十八萬五千三百九十留、中央悉比利亞線路の第一區同四百七十二萬五千六百九十留に對し、尙ほ四十八萬六千二百二十三留を増し、之が支出を決定する事。
- 第二 南烏蘇里鐵道のために備ふる車輛等の豫定費額百四十七萬二千五百留に對し、尙ほ十一萬三千三百留を増し、之を支出する事。
- 第三 中央悉比利亞線路の第二區に備ふる車輛等の調製費は六百六十四萬六千八百八十五留、北烏蘇里鐵道同二百九萬八千八百八十四留と算定し、之を支出する事。

次てチユル井ム河及アンガラ河の航路改修費增加案、即ち本年に於て更に五十萬留を支出せんとする工部大臣の提議を可決せり。

十九回以後の會議は如何なる報告をなし、如何なる議決をなせしや、未だ詳かに知るの機

會を得ざるも、大事業の實行は少しも其の歩を緩むことなく、大事業を委任せられたる悉比利亞鐵道會議は既に廿四回の會議を経たり。アレキサンドル三世は其の先帝及び先帝の如く歐羅巴歴史の中心たる治代を身後に傳へざりしも、此の大事業の四分の一を完成したりとの一事を以て長く、露西亞一國のみならず、直接の利害を感じる諸隣國の記憶に残るべし。アレキサンドル三世治代の間、皇太子として悉比利亞鐵道會議を長たりしニコラスは、今や皇帝として依然悉比利亞鐵道會議を長たり。其の皇帝として議長の倚りに坐せし最初の會議——第二十回會議に於て衆員に諭げたるもの、中、左の數語の如きは、此の大事業に大利害を感じるもの、注意を惹起するに足らむ。

『悉比利亞鐵道の築造は、實に先帝の最大事業の一なりき。……我儕は平和と文明を目的とする大計を承せり。……これを完成するは我儕の神聖なる天職也。……朕は痛しんで皇天に誓ひ、廉價と迅速を以て先帝が附托したる至大の事業を完成せんことを期す。』

東西南方面よりの工事着々歩を進め、西方よりはチエリアピンスク、オムスク間の工事既に完成し、首都ベテルブルクより一條の鐵路ズラトウスト、サマラを経て、オムスクに達するを得べく、東方よりは浦鹽斯德、クランスカヤ間の線路僅かに一ウエルストを残して

竣工し、中部悉比利亞鐵道線路の第一區なるオムスク、クラスノヤルスク間三百ウエルストも落成し、西部悉比利亞鐵道線路の一部なるオムスクよりオビ河に達するもの、中百ウエルストは既に開通せり。遅くとも千八百九十年の始めに於ては、悉比利亞鐵道大成を祝する未曾有の盛典を見るべしと計算せらる。

千八百九十一年——二年、悉比利亞貫道大鐵道敷設の議遂に決定せられたる頃に於ては、露西亞の財政は其の速成を許さず、十三年の長日月を以て完成すべしと豫定せられたりき。侵略的露西亞の軍事社會は此の如き緩漫を忍ぶ能はず、ゼチラル、アンチコフの三年説大に勢力を得るに至り、兩者を折衷し、八年を以て完成するに決定せられたり。而して實際の施設は、豫定の如く、若しくは豫定よりも速やかに完成せんとす。一事以て露西亞の銳意活力を知るべく、以て此の如き國と隣するものを警戒するに足る。

第三、完成の後は如何。

悉比利亞貫通鐵道の大工事は今より五年を経ずして完成せんとす。此の大工事の完成は如何なる大結果を齎らし來るべき乎。休戦外交の現時代に於て、最初に我等の注意を惹起する最大の商量は、軍事上の結果也。露西亞が此の大事業を決定したるもの、軍事的效果を豫想して然りしこと固より云ふを要せず、單に軍事的效果のみならず、軍事的效果と共に悉比利亞の平和的秩序的發達を期して然りしことも亦た固より云ふを要せずと雖、悉比利亞の平和的秩序的發達——即ち經濟的效果を主とする論者によりて設計せられたる水陸並用交通線路を緩漫なりとして排斥し、遂に貫通大鐵道敷設を決定するに最も力ありしは軍事社會なりき。而して貫通大鐵道決定の後、經濟社會が、當時露西亞の財政に量り十三年を期して完成せんとしたるを緩漫なりとして排斥し、遂に八年に縮めたるに最も力ありしは軍事社會なりき。軍事社會は實に、露西亞をして、戦争により飢饉により、財政の困難

露西亞は
直ちに強
くなり能
ふ乎

間接的効
果軍事前

殆○極○に○達○し○た○る○時○に○於○て、○悉○比○利○亞○大○鐵○道○敷○設○を○決○定○せ○し○め、○而○し○て○最○も○迅○速○に○之○を○完○成○す○る○を○期○せ○し○め○た○り。○さ○れ○ば○此○の○大○事○業○の○完○成○に○よ○り○て○影○響○を○蒙○る○べ○き○地○位○に○立○て○る○も○の○が——○或○は○露○西○亞○自○身○か——○其○の○軍○事○的○効○果○を○最○初○に○數○ふ○る○も○の○固○よ○り○當○さ○に○然○る○べ○し。

さらば露西亞は今より五年を経ず悉比利亞鐵道の完成する曉に於て、東歐の土耳其に加ふるが如き壓力、中亞の英領印度に加ふるが如き壓力を、直ちに東亞の朝鮮、滿州及び日本に加へ得べき乎。露西亞は歐羅巴方面に於ての強國なるか如く、悉比利亞鐵道完成の曉に於て、直ちに亞細亞方面に於ける強國となり能ふ乎。我等思へらく、然らず。

露西亞の力は無量也。之を十二分に絞らば四百萬内外の兵を得べし。其の二百萬を以て歐羅巴方面に雄を振ふに足るとせば、他の二百萬を以て亞細亞方面に權を張るべし。されど大陸國なる露西亞の海は餘りに狹僻なり、偏小也、而して其の陸は餘りに廣漠也、遠隔也。悉比利亞の交通不完全なる間は、露西亞は亞細亞方面に於て用ひ得べき兵力二百萬を有しながら、實際に於ては僅かに百分の一を用ひ得るに過ぎざる也。さらば悉比利亞鐵道貫

通すべき五年の後は如何。砂は直ちに金となる能はず、鐵道は直ちに兵力となる能はず。鐵道貫通前の事情は、貫通の瞬時に於て變するものにあらず。廣漠なる未開の土地に於て、散布せる稀薄の人口を以て、單に鐵道の通ずることのみにより、如何にして無數の兵を數千里の極東に輸送することを得る乎、假令、之を輸送し得るとするも、如何にして之を給養せん乎。鐵道貫通前に於ける不便の事情は、貫通の瞬時に於て直ちに變せず、滅せず、露西亞は悉比利亞鐵道の大工事を完成したる後、亞細亞方面に於て用ひ得べき兵力二百萬を有しながら、實際に於ては十五六萬を極東に輸送し、給養し、使用し得るに過ぎざるべし。露西亞は悉比利亞鐵道に於て軍事上直接の効果を收むるを望む能はず、假令之を收むるも極めて微小のものたるを免れず、軍事上確實に收むべきは、寧ろ間接の效果なり。而して此の間接の效果は、實に最も大にして最も恐るべきものたらざるばあらず。語を換へて之を云へば、露西亞は悉比利亞鐵道によりて悉比利亞を殖民し、其の富源を開發すべく、既に悉比利亞を殖民し、其の富源を開發したる後、始めて最も大にして最も恐るべき亞細亞的勢力たるべき也。

悉比利亞は富饒無比の天府也。其の進歩の最大障礙は、單に露西亞本土との交通を欠くのみならず、悉比利亞内に於て政治的中心と商工業中心との交通を欠きたることなりき。悉比利亞貫通大鐵道は此の最大障礙を除かんとす。悉比利亞に於ける線路の延長七千餘里、而して線路の左右百露里の地、其恩惠を蒙るべしとせば、獨逸、澳地利、匈牙利、和蘭、白耳義、噠馬等を合せたる中部歐羅巴よりも廣大なる新地、露西亞に與へられたる也。廣大なる土地は温帶緯度に屬し、耕せば穀を荳るべく、鑿てば鐵を得べく、オビ、エニセイ、アムール、レナ等世界最大河の水路も亦た其の範圍内に在り。

十二分の商量を経たる線路が經過するイシムスク、パレピンスク、クルンヂンスクの「スナップ」は比類なき豊饒の土地として悉比利亞の穀倉たるべし。單に烏拉爾鐵道のみを通によりて、此の地方の開拓大に進み、大なる収益を露西亞に與へたりき。烏拉爾鐵道が單に此の地方の水路を本土と連絡せしめたることのみによりて、開拓上殖民上、著しき結果を齎したりとせば、此の地方を貫通する悉比利亞鐵道が如何に大なる結果を伴ひ來るべきかは云ふを要せざるべし。露西亞政府は既に此の大なる効果を收めんことを務めつゝ、

ある也。

悉比利亞鐵道はまた悉比利亞に於て——若しくは世界に於て——最も富有なる鐵物の金庫を經過す。工業の二大要素たる鐵と石炭とは到る處としてあらざるはなく、其の脈豊長にして其の質良好也。從來二三の小工場創設せられたるも、市場を距ること甚だ遠く、需要甚だ少なく、充分に天然の賜を利用すること能はざりき。悉比利亞鐵道は最大の障礙を除くと共に最大の需要を刺激すべし。悉比利亞鐵道敷設工事其物、既に最も大なる需要たるべく、工事の落成は更に大なる市場との交通を使すべし。されば悉比利亞鐵道工事以來、中部に於て、東部に於て、製鐵業の勃興せしもの固より自然の結果と云ふべく、自然の獎勵に加ふるに、政府の獎勵を以てし、而して鐵道貫通の獎勵を以てすれば、悉比利亞が世界最大の製鐵地の一となるも期して待つべき也。工場を運轉し、鐵道を運轉するに最も重要な石炭は既に多く發見せられたり。而も森林地方の薪材は石炭なきも、長き間、工場を運轉し鐵道を運轉し得べかりし也。悉比利亞はまた貴重なる金鑛を有しながら、勞働の不廉、機械の不備、輸搬の不便に制せ

られ、他の國に於て有し得べき産金額を有する能はざりき。鐵道一たび貫通せば、輸送の便備へられ、機械の利整へられ、低廉なる勞働供せられ、總ての金鑛開鑿せらるゝことあらむ。

大鐵道が興ふる運輸の利が内地の商業を奨勵し、需要を増し供給を便にすることは、今更ら云ふを要せず、悉比利亞は本土の市場と連結せられて、最も大なる原料産出地となるべし。

若し夫れ、悉比利亞貫通鐵道が世界の貿易に及ぼす影響に至つては、既に多くの著書、論文によりて繰り返されたる所。太平洋端と太平洋端とを連結する大鐵道は、皆に露西亞の貿易に新線路を供するのみに止まらず、實に世界の貿易に新時代を來すやも未だ知るべからず。千八百八十九年ニッニ、ノブゴロツト博覽會に於ける露西亞商民等の代表者等、此の大鐵道に關し具申せる中に曰く――

「此鐵道は露西亞に取りて經濟上最大最重のものたるべく、露西亞工業に對して最大の動力たるべし。歐羅巴は露西亞によりて四億萬の支那人民、三千五百萬の日本人民と通するに至るべし。太平洋の市場を占有せんとする獨逸の慘憺刻苦、及びパナマ運河を完成せんとの經營は、既に始まりたる經濟的競争の太平洋に終局することを明示す。加奈

陸鐵道は露にスエス運河を經由せる絹、茶及び毛皮の積荷の一部を吸集せり。此等貨物の一部は露西亞を經由するに至るこゝ疑ひなし、スエス運河によりて歐羅巴より上海に達するは四十五日を要し、加奈陸鐵道によりては三十五日を要する間に、浦潮斯德より悉比利亞鐵道によりては十八日若しくは二十日を要するに過ぎざれば也。

悉比利亞の富源が鐵道によりて開始せられなば、鐵道會議が早くより注意し調査したる如く、日露及び清露の貿易は世界の貿易に一新事實を興ふるに至らん。特に西北支那――他の西洋人、東洋人の足を着け能はざる場所に於て、露西亞のみ此に侵入して利益を壟斷する道路を有し、地位を占め得べき也。

悉比利亞鐵道は五年ならずして完成すべし、されど悉比利亞鐵道が完成すること、ペテルブルクと浦潮斯德とか一連の鐵道によりて連結せらるゝこと、悉比利亞の大原野が露西亞の大道たるべきことは、必ずしも露西亞が歐羅巴方面に於て強きが如く、亞細亞方面に於て直ちに強くなり能ふとの謂にあらず。武力の強大は土地の充實より來る。されば露西亞は悉比利亞鐵道によりて軍事上大なる効果を直接に收むる能はざるべし。亞細亞方面に於て露西亞が眞に恐るべき強大の勢力たるべきは、固より悉比利亞大鐵道完成の後に在り。されど悉比利亞大鐵道の完成は即時に露西亞を強大の勢力たらしむる能はず、亞細亞方面

後十五年乃至

我等の地位にあらざる

に於て、露西亞が眞に恐るべき強大の勢力たるべきは悉比利亞大鐵道完成の後、悉比利亞大鐵道により悉比利亞の殖民、開拓成功の後、悉比利亞大原野充實の後にあり。乞ふ我等をして更らに適切なる言を以て繰り返さしめよ、亞細亞方面の露西亞は、今日に於て、決して決して恐るべきものにあらざ、五年の後に於ても、決して決して恐るべきものにあらざ、亞細亞方面に於て露西亞の眞に恐るべき強大の勢力となるは、十年の後、乃至十五年の後に在りと。

極東に於ける露西亞の地位此の如しとせば、極東に國を立つる我等の地位の一方面既に明瞭也。國を立てたるもの、少なくとも將來五年乃至十年の計を定め、之を實行し之を繼續せねばならぬものとせば、我等が將來五年を期し十年を期して立つべき方針——軍事的、外交的、經濟的方針の少なくとも一方は既に明瞭なるものにあらざや。我等が現在に於て——實に現在に於て執るべき方針固より明々瞭々なるものにあらざや。而して……

明治廿八年十月廿二日印刷
 明治廿八年十月廿五日發行

定價三十五錢

著 者 平 田 久

東京々橋區日吉町四番地

發 行 者 垣 田 純 朗

東京々橋區西紺屋町廿六番地

印 刷 者 高 田 乙 三

東京々橋區日吉町四番地

發 行 所 民 友 社



東京々橋區西紺屋町廿六七番地

印 刷 所 株式會社 秀 英 舍

平田久著

第十二卷 豪カーライル

最も精巧なる肖像手蹟あり。定價十八錢。郵税四錢。

○近世の大作家トマス、カーライルの一生を悉く語り近時の著述者讀んで自ら愧る所を知られ(大
 阪朝日)。豪壯の筆を以て、併も同情の念を馳せ、之を傳せしもの、謝すると多しと云ふ可
 し。時世の強者として生れたる彼れ飽くまで、すれたるを厭はずと面白し(如し(評論))。選
 られ、今獨野に叫ぶ保賢者の聲を聞け。と結ぶ處意ありけり。時世に響くが如し(評論)。

著者は昔て「伊太利建國三傑」を物して傳記評論の技倆を示して、此の縮希世の作家トマス、カ
 ライルの一生の事業と其の經歷と特質とを興味ある筆をもて叙評論し頼る其の要を得たり
 案するに我が方今の社會其の何れの方面に於てもカーライルの如き勇猛の偉人を欠けるを久し
 此の一冊子と能く幾多の情夫を起し、平田久氏の功に尋常傳記家の功たるに止
 まら(早稲田文學)。カライルの生涯は平田久氏の手に頼りて面白く吾人に示されたり
 (都新聞)。十九世紀の怪物、矛盾と撞き合はる一身に集めたり、彼をば、從に横に右より左よ
 り之を觀察し、讀者をして親しく彼が心算を見るを得せしむるもの、是れ實は價高き勢力なり、
 知是は近來の好著述(九州日々)。

發兌元

民友社

東京東橋區
日暮町四番地

平田久著

第十二卷 豪カーライル

最も精巧なる肖像手蹟あり 定價十八錢 郵税四錢

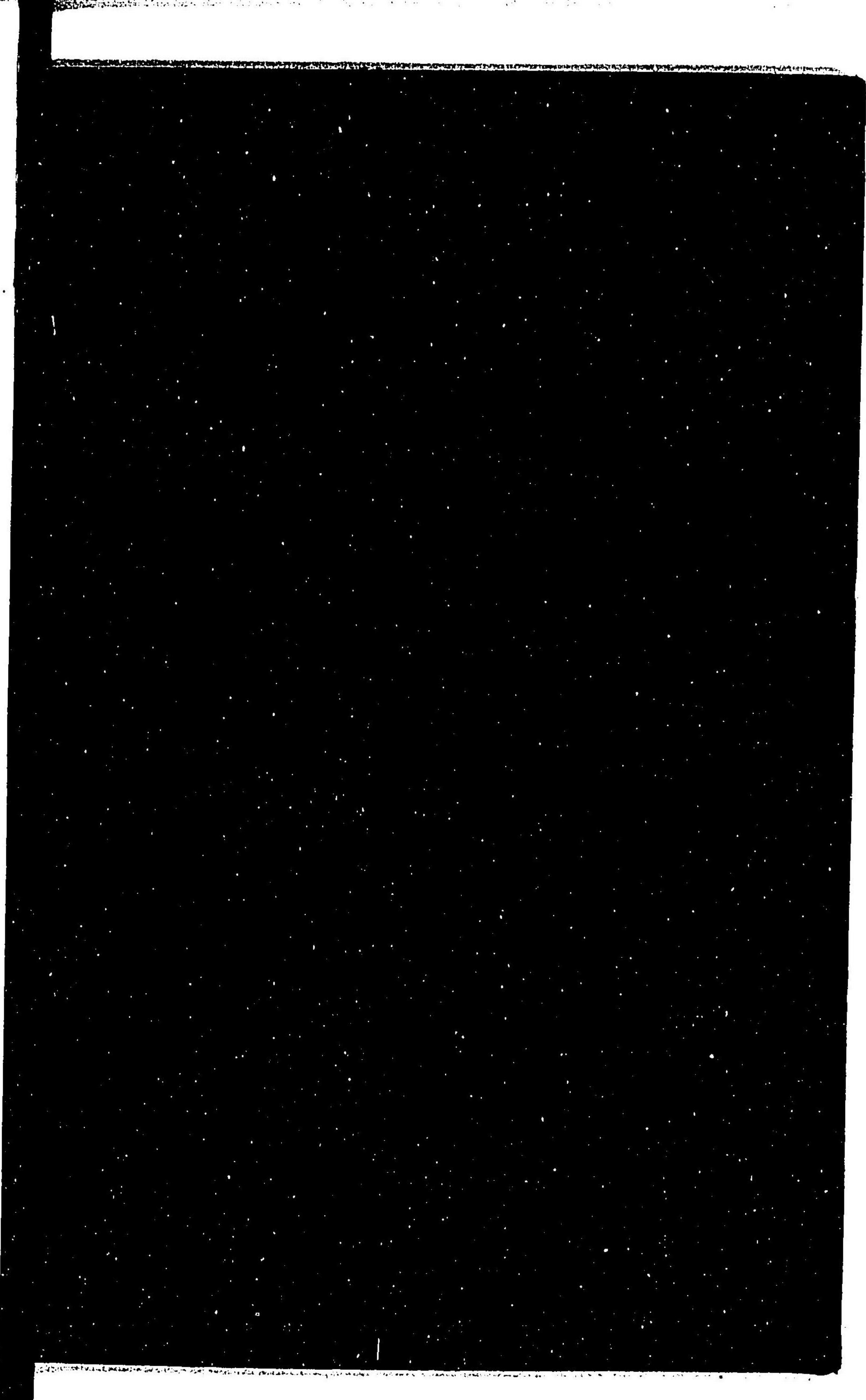
○近世の大文豪トマス、カーライルの一生を悉く語り、近時の著述者讀んで自ら愧る所を知れ、大
 阪朝日。時世の強勁者として生れたる彼れ飽くまで、之を傳せしもの、謝するも多しと云ふ可
 し。今世の強勁者として生れたる彼れ飽くまで、之を傳せしもの、謝するも多しと云ふ可
 著者は伊太利建國三傑を物して傳記評論の技倆を示したり此の篇希世の文豪トマス、カ
 ライルが一生の事業と其の經歷と特賞とを述べたり此の功は尋常傳記家の功たるに久し
 案するに我が方今の社會の何れを起したるもカーライルの如き勇猛の偉人を欠けると久し
 此の一冊子若し能く幾多の懦夫をして起したるもカーライルの如き勇猛の偉人を欠けると久し
 まらば(早稲田文學)カーライルの生涯は平田久氏の手に頼りて面白く吾人に示されたり
 (都新聞)十九世紀の怪物、矛盾と撞き合ふ一身に集めたり、彼をば、縦に横に右より左よ
 り芝を觀察し、讀者をして親しく彼れ心算を見るを得せしむるもの、是れ實は假高き勢力なり、
 知是れ近來の好著述(九州日々)。

發兌元

東京市京橋區
日吉町四番地

民友社

72
607





026877-000-5

72-307

露西亞帝國

平田 久/著

M28

ADF-0059

